九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（二）：第六～第八、第一一話和訳

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授

http://hdl.handle.net/2324/2230531

出版情報：哲學年報. 78, pp.55-103, 2019-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（二）

――第六～第八、第一一話和訳――

岡野　潔

前回に引き続き、Hahn (2007) と Hahn (2011) の校訂テクストに基づき、飜訳を行う。

インド古典文学史上最大の詩人と呼ばれるカーリダーサの作品を読んで、サンスクリット美文学（カーヴィア）がもつ強い特殊性に驚き、少し辟易した人は多いと思うが、そのような読者にはインド仏教文学の最大の詩人といえるハリバッタの作品をまず読んでもらいたい。ハリバッタの文学には、ヒンドゥー教詩人たちのインド土着の伝統に内向きになりすぎた美文学とは違い、人間の心に強く訴えかける洗練された普遍性がある。異邦人が読んでも、彼の作品には心の琴線に触れるものがある。時代と地域を超えて、文学鑑賞に堪えるといえる。彼の文学がもつ普遍性は、盛んな海外貿易によって促進されたコスモポリタニズム（世界主義）がまだ濃厚に残存していた、五世紀初頭の西北インドの仏教徒コミュニティの文化的雰囲気から生まれたものなのであろう。

第六話　ルーピヤーヴァティー（銀色女）ジャータカ(1)

女〔に生まれた時〕でも、菩薩は自分の体から肉を切って与えました。まして、いっそうの勇気や体力があっ

て、他者を益することに有利である、男〔に生まれた〕場合はいうまでもありません。〔六・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　(a)種々の園林の深緑〔の彩り〕が〔都の〕周囲を縁取る、(b)財の神クベーラ〔と競うか〕のように派手に振る舞う商人たちに満ちた市場通り（商店街）がある、(c)あたかもガーンダーラ地域〔という額〕の上の額飾りとして、大地〔という女性〕がつけた装飾品のごとき〔美しさをもつ〕、ウッパラーヴァティーという王都がありました。その王都は今はプシュカラーヴァティー(2)と呼ばれています。その地に、菩薩（釈尊の前世）は青春期を迎えて愛らしさと美と輝きに充ち溢れているルーピヤーヴァティー（銀〔の輝き〕をもつ女、銀色女）(3)という名の一人の女性として、まるで自身の住処における一人の精霊（守り神）であるかのように、在られたのです。

〔制御して自己を〕鎮めていることと、他者を助けるために活動することと、心の〔働きの〕鋭敏さによって、人々に驚異の念を起こさせる彼女は、まるで『憐れみ』そのものが〔地上に〕具現した姿であるかのように見えました。〔六・二〕

◇　ある時、その地方において、(a)蔵や穀物倉庫〔の蓄え〕が尽きたのを眺めて人々はうちひしがれており、(b)太陽光線の激しい熱によって雪山の氷雪が残り無く溶け失せて、(c)氷雪がないゆえに川の水が涸れ、(d)水がないゆえに稲田が枯れ、(e)その〔有様〕を眺めて農夫たちは絶望し、(f)〔彼らを〕訪う客人（乞食者）たちの願いも満たされることなく、(g)ひどく衰弱した牛飼いたちが後をついてゆく、まばらになりつつ生き残っている牛たちの群がおり、(h)貧しい人々がもはや食物のことしか考えられなくなった、(i)まるで悪人たちとの交際のように苦しみをもたらすものである、甚だ大きな干魃が、〔世の人々の〕善根が消滅したゆえに、起こりました。

食物がないため〔飢えた〕女たちの、〔かつて〕輝く黄金の瓶のようであった重たい乳房は、美しい乳首が沈みこんで、硬い張りを失いました。〔六・三〕

〔女たちの美しい〕蔓のような腕は、〔肌の〕色つやを失い、甚だしく痩せ細りました。目に絶望を湛えた女たちがつけている腕輪は〔次第に〕ゆるゆるになりました。〔六・四〕

(a)〔光沢を失った〕ざらざらした髪に覆われて、(b)まるで夜が終わる〔明け方の〕月の〔ように〕灰白色をした、女たちの顔には、眉毛の艶めかしい動きや微笑の浮かぶことが無くなりました。〔六・五〕

主婦は家の内側に泥を塗り、また古くなった食べ物を子供たちに与えましたが、〔それらの事にまして〕彼女が自分に最も悔しさを感じていたのは、夫が空腹によって打ちひしがれているのを見ることでした。〔六・六〕

(a)仔牛が死んでしまったので、〔草を探して〕歩き回るのをやめて、(b)林から家に戻って来た、(c)一声うなる声をあげて(4)胸垂（首元にある肉垂れ）が揺れている、一頭の母牛〔の姿〕は、主婦の目を激しく涙で溢れさせました。〔六・七〕

草を食べられないことから、次第に衰弱してしまって緩慢に歩く雌牛たちの、張りがひどく失われた乳房からは、乳が涸れて出なくなりました。〔六・八〕

ひどく衰弱して心乱れた牛飼いは、少し下唇を噛み、〔牛の〕尾の付け根につかまり、もたれかかりながらも、骨のつなぎめが明瞭に浮き出るほど痩せ細った老いた雌牛を、なんとか〔懸命に〕起き上がらせようとしていました。〔六・九〕

(a)食物も飲物も尽き果て、財産である牛も死んでしまい、(b)襤褸布で〔己の〕青白い身体を覆っている、(c)その地域に住んで〔旱魃の〕被害を受けている人々は〔もはや〕家を捨てて逃れ出すことも出来ませんでした。〔六・一〇〕

◇ ある時ルーピヤーヴァティーは或る住居において、(a)出産をしたために激しく燃え上がった飢餓の火に体じゅうが焼かれて〔苛まれ〕、(b)ひどくこけた頬と眼窩と腹が空洞のようにへこみ、(c)肋骨のならびが浮き出て、(d)非

常に穢いぼろぼろの衣で身を覆い、(e)自己愛の重さのゆえに子供への愛が消え失せて、(f)〔今や〕その赤ん坊を殺そうと願う、或る一人の召使女を見ました。

彼女を見て、ルーピヤーヴァティーは言いました。「姉様、このようなあまりに酷い行為をどうしてなさろうとするのです。」

その女はこう考えました。「このルーピヤーヴァティー様は、布施を習慣にされる、憐れみ深い方だ。それ故、この私の窮状をこの方に話したら、きっとこの方は私の飢餓に対処してくださる。」―このように考えて、答えました。「姉様、ああ、私は出産によって激しさを増した飢えの火に体じゅうを苛まれています。だから、この子を食いたくてたまらないのです。」

〔かように〕生き物たちがもつ自己愛は、まことに自分の子供すら仇敵のように見なして、法と非法と〔の境〕を見ないものです。〔六・一一〕

◇ ルーピヤーヴァティーは、憐愍の心が生じさせた涙でその蓮華の目をかき曇らせ、かの女性に次の様に語りました。

「ああ、(a)あわれに泣くことによってのみ〔自分の〕苦しみを示せるだけの、(b)絡まった巻き毛の髪の毛をもち、(c)子鹿のような可愛らしい目をもつ、この小さな子を、非情なひとよ、どうしてあなたは食べれるのでしょう。〔六・一二〕

(a)上にもちあがった髪の房（髻）が風に揺れていて、(b)大地の塵〔の付着〕によってまつげが汚れている幼子は、他人の子であっても、やさしい心をもつ女たちにとって、いとしいものです。〔六・一三〕

(a)笑うと蕾のような唇が震え、(b)〔おでこに〕額飾りをつけていて、(c)大きな眼をもち、(d)詰まりながらも〔言葉を〕とぎれとぎれに発する〔であろう〕(5)、この息子の顔をなぜあなたは見つめようとしないのですか。

〔六・一四〕

幼さゆえに乗馬のまねをして木棒の馬にまたがり、『カラスの羽』（男の子の左右の鬢）が汚れて縺れ絡まっていて、笑う時にきらめく〔真白な〕芽のような歯の並びが美しい、〔幼少期の〕息子をどんな女が見たいと願わないでしょうか。〔六・一五〕

(a)ぱっくり大きく嘴を開けて、(b)顔を差し出して見つめ、(c)食物を求めながら、(d)甲高い声を上げ、(d)懸命になって追随する雛鳥を、母カラスは飢えに苛まれながら養っています。まして〔人間の〕女は、いうまでもありません。〔六・一六〕

◇　また、いつかこの国の人々が〔このことを〕聞き知った時、激しい怒りから、「この女があの、子殺しだ」と、まるでピシャーチャ鬼女のように、あなたをこの国から追放するかもしれません。ですから、その性急で無思慮な行為をおやめになって下さい。

まるで雌虎が鹿の仔を食べるように、この子を食べることで、罪深いひとよ、もしかしてあなたは、〔地獄で〕赤熱した鉄丸を食べるつもりなのですか。」〔六・一七〕

◇　彼女は答えました。「姉様、ではどうしたらよいのでしょう。体じゅう〔を焼く〕この飢餓の火を私はがまんすることが出来ません。」

その時ルーピヤーヴァティーは次の様に考えました。「もし私がこの子を連れたまま〔食物を取りに〕行けば、〔その間に〕この人はきっと死んでしまう。しかし私が彼女の飢餓をいやす食物を、あまりに遅く持ってくるなら、〔その間に〕この人はこの息子を殺してしまう。

暗愚さによって、なすべき時がとうに過ぎてしまっている、何の成果もない行為をしても、人はただ落胆を得るだけだ。〔例えば〕日傘というものが、照りつける太陽が沈まない間だけ、差すことに意味があるように。〔六・

〔一八〕

◇ そしてこの今こそが〔行為に〕適した時だ。この私自身の肉で、彼女を喜ばせよう」と。―非本質的で堅固ではない、この壊れやすい肉体から、人は本質的で堅固なものを獲得すべきである。水流によって破壊されて〔徐々に〕ほどけてゆく根をもつ一本の岸辺の樹から、果実を〔獲得する〕ように。〔六・一九〕

◇ するとその女はまた言いました。「姉様、さあ行ってしまってください。あなたの前ではこの子を殺すことが私はできません。」

その時ルーピヤーヴァティーは彼女に言いました。「もしあなたがここで何か切る道具を持っていたら、それをとって下さい。」

そこで彼女はルーピヤーヴァティーに刀を手渡しました。

するとルーピヤーヴァティーは、その鋭利な刀で、自分の体の苦痛を顧みず、黄金の水瓶のような〔美しい〕形をしたふたつの、血を吹き出している乳房を切り取ってしまうと、飢えに苦しめられているその若い女に〔その肉を〕与えました。〔六・二〇〕

〔このように〕自分の苦しみを顧慮しない〔気高い者たち〕が、生き物たちの苦しみを取り除くわけは、彼らが自分の苦しみによってではなく、他者の苦しみによって悩苦するからです。〔六・二一〕

◇ その両乳房をその女に与えた後、ルーピヤーヴァティーは自分の家に〔戻り〕、入ってゆきました。

両乳房を切ったことで流れる血に染められた真珠の首輪や衣や腰帯の紐をつけている、その美しい体をもつ女は、まるで赤い栴檀〔の粉〕をもって供養がなされた〔女神の〕黄金の立像のようでした。〔六・二二〕

◇ その時ルーピヤーヴァティーの夫は驚愕して、座より立ち上がり、尋ねました。

「可愛いひと、羅刹のような極悪人の誰が、おまえの美しい体を、乳房が切り取られた体にしてしまったのか?」

〔六・二三〕

◇　彼女はその起こった事を夫に説明して、更に言いました。「あなたはどうか急いで、出産によって激しさを増した飢餓の火〔に苦しむ〕その女性に、食物と飲物を差し上げてください。」

するとルーピヤーヴァティーの夫は驚愕しながら、「そうしよう」と答えて、慈悲心の器そのものである彼女に頼まれた〔とおりの〕、器いっぱいに盛った美味の食べ物を、彼はかの不幸な女性に送り届けました。〔六・二四〕

その時、その〔都城の〕人々は、ルーピヤーヴァティーのその希有なる行為を目撃して、驚愕のあまり、手の指を〔まるで風に打たれた〕若枝のように、何度も震わせたのでした。〔六・二五〕

人々は次のように彼女に言いました。「あなた様のこの行為によって、たとえ慳貪な者たちであっても、心は必ずや施しへと励まされることでしょう。〔六・二六〕

あなた様はきっと、菩提を求める者たち〔菩薩たち〕に聞き知られている、かの布施波羅蜜〔「布施の完成」を意味する女性尊格〕が、人々を助けるために、肉体を具えて〔地上に〕在られているお方なのです。〔六・二七〕

ああ、〔このお方に〕何というコントラストがあることでしょう、その女であるということと、その鋭い判断力とは！――また何というコントラストでしょうか、その〔凄まじい〕布施と、その上品な柔和さとは！このすぐれた善女の、あらゆる布施を超える布施によって、他の施しをなす者たちは恥じ入っています。」〔六・二八〕

◇　その時ルーピヤーヴァティーの夫は、次のように「真実の誓言」をしたのです。

「これほどの布施〔の行為〕は、たとえ男であっても、かつて他の者になされたことがなく、前代未聞のことである――このことが本当にその通りであるなら、その真実〔の力〕によって、速やかに私の妻の両乳房が〔再び〕現れますように！」〔六・二九〕

かの主人（夫）が「真実の誓言」を行って、このように語ったとたん、彼女に再び、乳房の重さによって重たげな胸が生じました。〔六・三〇〕

〔まるでそれは〕ルーピヤーヴァティーという蓮池が、その都城に再び輝き出たかのようでした。〔その蓮池では〕『布施』という水によって人々が喉の渇きを癒し、また〔彼女の〕『歯の光線』という花糸〔の輝く〕美しい『顔』という蓮があって、また『重たい両乳房』というオシドリの番いがいます。〔六・三一〕

◇　さてその時、神々の王（インドラ）は、「ひょっとしてルーピヤーヴァティーは、あらゆる人の布施より遥かに勝れたその布施によって、私を神々の都から追い落として、自分が神々の王位に就こうと願っているのではないだろうか」と考え、内心不安になり、彼女のその本心を何とか知りたいと思う心をいだいて、拡がった雨雲の覆いによって真っ暗になった空のなかを潜って抜けて、王都ウッパラーヴァティーに降り立つと、(a)蓮根の繊維のように真っ白な聖紐が胸を飾り、(b)首には紐で数珠がつけられ、(c)女の眼のような斑点をもつ黒い鹿皮で肩の一部が覆われ、(d)右の手に枝葉で造った小籠（鉢）を載せている、バラモンの姿に化けて、彼はルーピヤーヴァティーの住まいへ、施食を乞う者としてやって来ました。ルーピヤーヴァティーは様々な硬食・軟食を取ってきて、バラモンの姿で化現しているシャクラ（インドラ）に与えました。紹介の言葉を交わした後、頃合いを見て、神々の王は彼女に次のように言いました。

「(a)乳房の布施から生じ、(b)普く拡がった、(c)まるで螺貝から切り取られた薄（真珠層）のように純白である、あなたの名声によって、この世界は荘厳されました。〔六・三二〕

この苦行によって、あなたはインドラの地位を得ようと願っているのでしょうか。善きご婦人よ、好奇心から私はあなたに質問するのです。」〔六・三三〕

彼女は神々の王にありのままに答えました。―「三界〔の生類の苦〕を鎮め滅するために、私は仏陀になるこ

とを望んでいるのです。バラモンよ、私のこの真実〔語〕によって、生き物の世界における徳性の器である『男性たること』が〔私の身に〕ただちに起こりますように！」〔六・三四〕

このように語ると、彼女〔の身〕は男性に変化しました。シャクラは喜悦した心で、自らの都に戻りました。世界に起こったこの驚異の出来事を知ると、人々は確信をいっそう強めました(6)。〔六・三五〕

彼女の月のような顔の上に〔ポツポツと〕まばらに現れ始めた、アンジャナ（化粧のアイライン用の塗墨）の粉のように黒い、髭の発生を見て、〔彼女の〕象の額の隆起部のような丸い膨らみをもつ二つの乳房は、まるで恥じたかのように、広くなった胸の上でただちに消えてしまいました。〔六・三六〕

◇〔その後〕菩薩はルーピヤーヴァタという〔男子の〕名で知られるようになりました。さて或る時、王都ウッパラーヴァティーでは王が、継ぐ子をもたずに亡くなりました。王が亡くなると、まるでラーフ（月蝕という鬼）に捉えられた月の夜のように、かの都城は輝きを失いました。王を失って悲しみを募らせていた大臣たちは、数日が過ぎた後、後宮の女たちを慰めてから、都民の集まりに対して次の様に言いました。「指導者を欠いていれば、この国はいつか、敵によって攻め込まれ、富を奪われるかもしれない。〔例えば〕燃えている家を消火しようとして井戸を掘っても〔その行為は〕もう時を逸しているように、我々の努力も〔その場合〕徒労の原因となるのみであろう。それ故、次のことは今の時機に適ったことであろう――あのルーピヤーヴァタという若者は王者としてのあらゆる相をもち、人をひきつける徳性(7)を完全に具えている。それ故、我々はこの者を王にするため、灌頂（王の即位式）の儀式を行おうではないか」と。

歓喜に高揚した心をいだいて、都民たちは、他者を助けることに専心している彼に対して灌頂を行いました。〔王の〕付き人たちは、心悦ばせる白い日傘を、一対のチャーマラ（王権の象徴である払子）を伴って、高く掲げました。〔六・三七〕

都民たちは市場通りや塔門に花綱をつけ、また芸人たちの〔路上の〕演技によって心愉しいものにし、また香水をふり撒いて道や車道を芳しくして、その都城を、クベーラ神の宮殿に比すべき〔姿〕にしました。〔六・三八〕

正しい時節に雨雲は〔大地に〕十分に水を与えました。〔飢饉などの〕天災が不幸をもたらすことはもう決してありませんでした。かの王が大地を正しい仕方で支配している間、民衆は『苦しみ』という語を〔人から〕聞くことすらなかったのです(8)。〔六・三九〕

耕すことをしなくても、カラマ稲はいっぱいの米を実らしました。樹々は絶えず花や沢山の実をつけました。かの善き王プリトゥ(9)が国を守った時代のように、牛たちは自ら豊かな乳の流れを〔搾乳において〕与えました。〔六・四〇〕

(a)惜しむことのない布施によって〔人々の〕願いを満たし、(b)〔国王の〕三種の力(10)によって繁栄をもたらし、(c)〔自己の〕感官を抑制し、(d)その身体が様々の『徳性』という飾りをもって荘厳されている、かの王によって、大地は理想の王をもったのです。〔六・四一〕

〔属国の〕王たちによって〔その〕蓮の足は拝せられ、〔その〕玉顔は蓮のごとく〔麗しい〕、王中の獅子たるその方は、〔種々の〕宝石で美しい獅子座（王座）に上ると、よく識別した法を持つ者として、最高の真理を果実としてもたらす教えを、民衆のために〔次のように〕説きました。〔六・四二〕

「布施がもたらす、この「異熟」（果として業が熟すること）の偉大さを見なさい。その力によって、まさにこの〔人生〕で、私から女性性が取り除かれ、この男性性が〔私の体に〕出現せしめられたのです―王位において楽しまれるべきものとして、〔古から〕広く知られた人生の成果である、『人生の三目的』（実利・享楽・法）をもつものとして。〔六・四三〕

このことは、『布施』という樹から生じた〔現世での〕「花」（花報）にすぎません。来世では、他におびただし

い「果」（果報）があるでしょう[11]。そのことをよく考えて、『施を乞う人々』という大地〔の地中〕に、道徳性において清らかである、あらゆる『布施』という財宝を数多く貯蔵しなさい。〔六・四四〕

もし『施しを乞う人々』という耕作地で、『徳性』という水が濯がれなければ、『布施』の果を期待する者としての『布施者』は、どうして『布施』という種子を成長させることができるでしょうか。〔六・四五〕

名声や福徳を与えてくれる者であり、〔その点で〕親族よりもはるかに勝れている、『施しを乞う人々』を、いかなる賢者が、まるで蛇〔がくねる〕ように両眉をしかめること（渋顔）で、怯えさせてよいものでしょうか。〔六・四六〕

こちら側の人（施しを乞う者）は、繰り返し〔相手を〕誉め讃える言葉を語っているのに、そちら側の人（布施する者）は、不快な声の響きをもつ言葉を〔相手に〕語ります。またこちらの人は、敬意をこめて見つめるのに、そちらの人は、財産による高慢から軽蔑心をもって見つめます。またこちらの人は、すばらしく福徳と名声を与えてくれるのに、そちらの人は、たった一つの物品を与えるだけです。これら両者の徳質〔の違い〕から、私の考えでは、はるかに施を乞う者のほうが、布施者よりも勝れています[12]。〔六・四七〕

もしあらゆる方角の空間を、『徳性』という花環の香りで芳しいものにしたいのであれば、また更に、大きな快い果実を〔将来〕享受したいと願うのであれば、大きく繁って『偉大な名声』という木蔭をもたらすものである、『財』という樹々を、『施を乞う人々』という大地の上に、毎日〔植え込んで〕育てなさい」と。―〔六・四八〕

〔こうして〕偉大な力をもったかの王は、六十年間、この世界に入って〔世に従事し〕、施を乞う人々と有徳の人々をたえず幸せにし、睡蓮のように白く浄い名声によって全方角の空間を輝かせてから、別の生へと去ったのです。〔六・四九〕

◇

さあ、このように、女に生まれても、かの世尊は自分の〔体の〕肉を施されたのです。人間に生まれた者であ

れば、一体誰が、外的な物品（財）など気にかけていてよいものでしょうか―と、このような〔言葉で〕、布施する人々を励すために、〔この話を〕語ってあげなさい。

『ルーピヤーヴァティー（銀色女）ジャータカ』、第六話〔終わる〕。

第七話　資産家の子ジャータカ

卑しい者たちは、有徳の人のためであっても、肉体の外部にある物ですら、渋ってなかなか施そうとしません。気高い者たちは、たとえ動物たちのためであっても、〔自分の〕いとしい肉体すら、施すのです。〔七・一〕

◇　このように伝え聞いています。―(a)もし〔それが〕語られるを聞いたならば〔誰の〕心も魅了され、(b)また見られたならば〔必ず〕驚嘆を生じさせる、(c)北路（北の大街道）における枢要の地であり、(d)咲き誇るカマラ蓮やウッパラ蓮の蓮華の群に飾られた林苑をそなえ、(e)諸寺院に〔掲げられた〕はたぼこ（幢）やのぼり（幡）が風に吹き動かされている、〔ガーンダーラの〕王都ウッパラーヴァティーにおいて、あたかも神樹パーリジャータが〔天の世界に生じて神々の住処を〕飾るがごとく、菩薩（釈尊の前世）は一つの神々の都であるかのように〔その都で〕誕生して、資産家（長者）の家庭を輝かしく飾りました。

その時資産家は長子の誕生を得たことに歓喜して、(a)きらびやかな特別の宴が催され、(b)様々な打楽器の音を耳にして舞いをなす孔雀たちが中庭を飾り、(c)バリサカ蜂蜜ジュースと溢れ流れるマダ酒のせいで若い女たちの頬が赤く染まり[13]、(d)宝石造りの門には種々の芳しい花環が懸けられ、(e)従者たちが〔人々から〕ねぎらいの言葉をかけられて悦び、(f)親友や親族たちが来集した、自分の屋敷において、乞う人々のために大きな布施を行いました。

資産家の息子が発する、あたりをまぶしく輝かせる輝きは、月の美しさを霞ませてしまうほどでした。それゆ

え彼の親族は、まさにチャンドラプラバ（月光）という相応しい名を彼に付けたのです。〔七・二〕

◇　父は、日ごとに美と輝きが増大してゆく新月のようなその〔子〕を、或る一人の、論書や詩や技芸に精通し、学問や道徳などの徳質によって名を輝かせているグル（師）に委ねました。

久しからずしてその〔子〕は、感官をよく制御して、その〔師の〕弟子たちを、智慧においても学問においても、打ち負かすようになりました。〔七・三〕

すべての弟子たちを凌駕する彼の賢さをつぶさに見て、師は〔あらゆる〕問いにおいて驚嘆しながら、彼を誉め称えることに終始しました。〔七・四〕

〔無知の〕闇の厚い覆いを打ち破り、正しい道と誤った道を明らかにする智慧が、其処で（その教場で）甚だまばゆく輝きました。あたかも月光が夜咲きの白睡蓮の群がある池で、甚だまばゆく輝くように。〔七・五〕

彼は天眼によって発見して獲得したあらゆる伏蔵（地中に埋まった財宝）を、残りなくすべて乞う人々に与えて、幸福感を得ました。〔七・六〕

彼が自分の善性に見合った〔莫大な〕施しをなすにつれて、乞う者たちの「ください」という声が〔世に〕もう再び聞かれることはなくなりました。〔七・七〕

◇　彼のグルの五百弟子たちは、チャンドラプラバに次の様に言いました。「ああ、あなたは乞いに来る者たちに対して大変な同情心をお持ちになっていると私たちは思います。もし或る乞う者が、あなたに生命をくれと求めたなら、必ずやあなたはそれをその者に与えてしまうでしょう。」

菩薩は答えました。「いや、そのように言うべきではありません。同情心では、与える者よりも乞う者こそが、まさっているのです。なぜかというと、

〔乞う者は〕施す者に至福を与えようと願って、自分自身を〔施を受ける〕器にすることで、乞うということの

苦痛を耐え忍んでくれているのです。それほどの同情者は〔ほかに〕いません。〔七・八〕この世では名声、死後には〔幸せという業の〕果報として、それら両方を、乞う者は〔施した者に〕与えてくれます。他方、〔施した者は乞う者に〕財を与えただけです。それ故、彼〔乞う者〕は施す者よりも勝れています。〔七・九〕

乞う者が「ください」と請う時、彼は「見下される者」と人に呼ばれます。しかしもし施す者が「何も無いよ」と答えるなら、彼よりいっそう見下される者になります。〔七・一〇〕

結局のところ、〔乞う者とは〕施す者を助けるための『如意蔓』（あらゆる願いを叶えてくれる神話的な蔓草）のごとく働くのです。乞う者であることは、結果が明らかになれば〔むしろ〕称賛に価します。どうして見下されるものでありましょうか。〔七・一一〕

もしそれらの『乞う人々』という雨雲が、世の人々の繁栄のため、あらゆる所で『福徳』という雨水を降らしてくれなければ、『徳性』という真珠と『大名声』という深みを蔵する、『施す者』という大海はありえないでしょう。〔七・一二〕

◇　それから彼ら弟子たちは菩薩に更に尋ねました。「ではおっしゃってください。その偉大な布施の果により、あなたはインドラ神として〔再生する〕栄光を〔自ら得たい〕と願うのですか、それとも転輪聖王の地位を願うのですか。」

菩薩は答えました。「本性として滅しゆくものである〔インドラや転輪王の〕地位を、私の理性は欲しません。あなた方は〔次の点を〕考慮すべきです。

『存在』という画布の上に、『サンスカーラ』（形成力）という画家たちが、ものの色かたちを描いても、『無常性』という移り気な女性が、〔急に〕立腹したかのように、それらを全部ぬぐい去ってしまいます。〔七・一三〕

愛欲や憎悪を厭い捨てた善行者たちによって住まわれている『存在の頂き』（有頂天）すらも、悪意をもつ死神がやって来られない場所ではありません。〔七・一四〕

たとえ〔命が大切に〕守られても、あらゆる生き物の、命が持続する時間は次第に減じてゆきます。絵を描く時、下ろされた筆が、一瞬一瞬に〔墨を減じてゆく〕ように。〔七・一五〕

冷酷な『無常性』に出会うゆえに、『美と繁栄』は久しくは輝きません。四つ辻に置かれた灯明の焔が、風に打たれて〔吹き消える〕ように。〔七・一六〕

愚かな者たちは、雌ライオンを見るかのように、『無常性』をひどく恐怖して見ますが、学識ある他の者たちは、〔墓場で屍肉を食べるだけの〕雌ジャッカルを見るかのように、恐れなくそれを見ます。〔七・一七〕

死が、福徳を積んだ賢者の心を苦悩させることはありません。日傘の影に覆われている旅人に、太陽が熱苦を与えない〔ように〕。〔七・一八〕

人々にとって、どんな時でも富財は、憍酔・高慢・闇愚の原因となるゆえに、怒った毒蛇のように、危険で近づくべきではありません。それは、文法学における「黙字」〔の音素〕のように、一瞬のみ存続するものにすぎません。〔七・一九〕

このように、動・不動のあらゆる生類は水の流れに打たれる泡の集まり〔の如きもの〕と知って、人々は憍酔・高慢・愚痴の網を離れ、ただちに不生のために努力すべきです。〔七・二〇〕

◇ それ故、私は生類の苦しみを滅するため、非常に強く、この上ない完全な悟り〔の実現〕を願うのです。」

すると彼ら弟子たちは歓喜心を抱いて、次の様に再び言いました。「〔それをお聞きした以上〕どうして多言を要するでしょうか。

(a) 両眉の間にあって月のように光をまぶしく放っている白毫をそなえ、(b) 闇を打ち破る光線の円輪を〔空間

に〕拡げて、(c)徳性の偉大を有し、(d)金箔のように〔金色に〕輝き、(e)生類に解脱の道をお説きになっている、(f)仏になられた未来の、あなたのお姿を私たちは見ます。〔七・二二〕

◇　悟りを得られたあなたのもとで、私たちも是非とも弟子にならせていただけないでしょうか。」―　菩薩は答えました。

「〔未だ悟りを得ておらず、今〕多くの毒蛇がいる深林を越え出たいと願い、努力して聖なる地所へと達しようと望む、いかなる者が、同行者たち〔と連れ立ってゆくこと〕を欲するでしょうか。」〔七・二二〕

◇　弟子たちは、「われわれが〔いつか〕不死の分け前にあずかることを、この偉大な方は認めてくださった」と考えて、喜心を生じて〔それぞれ〕自分の住まいに去って行きました。〔その後〕或る時、稠林にいて、菩薩は次の様に考えました。「私は施を乞う人々にもう十分に財を与えた。今や、自分の肉と血によって獣たちを喜ばそう。」

そう考えると、彼は刀と蜜とギー（バターオイル）を携えて、家の者たちには告げず〔独りで〕、―

サフラン色の衣に似た『薄明』というカーテンに覆われた西の方角の空間において、世界が次第に濃くなる闇の中に姿を消してゆく時、―

(a)家のなかで点けられている灯明の光と混じり合うことにより顔立ちの美しさがさらに倍増した若い女たちがいる、(b)また特別に見事な飾りを身につけ、魅惑的に眉の線をもち上げたり見つめたり笑ったりする媚態の釣り針によって愛人たちの心という魚を釣り上げようとしている遊女たちがいる、(c)また女友達から受け取った〔仕事の〕連絡を聞くために集中して一点を凝視している遊びの斡旋女たちがいる、(d)また愛しい人から密会の約束が来るのを待ち望みながら、額飾り（ティラカ）がどう見えるかが心配で鏡の表面を目をこらして見ている愛人の女たちがいる、―

(e)〔また家の外では〕聞こえ続ける乳の流れ出る音があり、(f)〔搾乳する〕牧女たちによって〔飲むことを〕妨げ

られた仔牛が〔しきりに〕乳を吸う動作をしてカウベルと喉袋が揺らされている若い雌牛たちがいる、(g)また十字路に坐り込んで〔ゆったり〕反芻する快さに目を閉じている市場の〔荷運びの〕雄牛によって道〔のゆきき〕が塞き止められている、〔そのような〕都の街路の空間〔の情景〕のなかで、酔ったバララーマ神の頬のように薄紅色に染まっている月が、『東の山』の山頂に昇って、夜咲きの睡蓮が開花して〔その〕香りを薫じられた風が〔吹く〕夕べの薄明の時が来た時、―

(a)最近夫が死んだ妻の〔梳くのを忘れた〕髪の房のように乱れている〔火葬の〕煙によって灰色になった様々な植物があり、(b)また邪悪な雌ジャッカルたちが上を向いて吠える時に開いた口から出る炎の輝きに照らし出された〔死刑の〕杭に刺し貫かれている人間たちの肩の上にとまったまま〔食った〕屍肉で膨れた〔体で〕じっとしている鷲や禿鷲やカンカ鳥（アオサギ）がいる、(c)またとても凶暴なラーマー（魔女）の群によって引き摺り出された半分焼けた〔火葬の〕薪の中に置かれた人間の死体があり、(d)或る場所では夜に徘徊する羅刹に人間の屍肉が食われている音を聞きつけて群なすブータ（化け物）の口から流れ出る唾液の滴りがあり、(e)別の場所ではダーキニー女たちの手が振りかざす肉切刀によって切られつつある人間の太腿から流れ出た血液の流れに濡れている地面があり、(f)また落ちつきのない火が〔差し伸ばす〕焔という指によって脅されたために後ずさりする〔夜の〕大きな闇がある、(g)また或る場所では新鮮な夜咲きの睡蓮のように純白で真っ白な頭蓋骨の連なりがあり、(h)別の場所では墓場に居る（塚間住の）比丘が〔不浄観のため〕見つめている最中にも女の死体から離れようとしないジャッカルの群がいる、(i)また或る場所では明呪を唱える者[14]が〔地面に〕画いたマンダラ[15]の周囲に居る四方を守護する神々が鞘から抜いた剣の〔刃の〕上に映された燃え輝く火の反射像に恐るべき光景が映っている、〔そのような情景の広がる〕大きな墓場へと、〔菩薩は〕やって来ました。

其処で憐れみの真言によって身体の守護をした菩薩を、羅刹女たちは誑かすことが出来ませんでした。その偉大

な人（菩薩）は、墓場の一隅で、(a)ジャッカルたちが引き摺り出したためにばらけて露わになった腹中の内臓の一まとまりや肉や心臓や肋骨や関節のある、(b)また風によって吹き上げられた〔火葬の〕薪の灰の粉によって真白くなって絡まり乱れた髪の房がある、(c)また鷲が唇をちぎり取ったので露出してしまった〔歯が〕欠け落ちた歯並びをもつ、死んだ若い女〔の屍〕をよく見て、厭嫌の心をいだき、それに向けた視線を動かすことなく、次のようにつぶやきました。「ああ、欲望をもつ人々がいだく、今しか見ようとしない心よ。嫌悪心を起こす原因となるこのような女の屍体に対してすら、彼らは欲望を起こすのだ」と。

じっと目を動かさずに愛する男に朱色の額飾りを〔額に〕塗ってもらっていた、その美しい女の魅惑的であった顔は、今日、ここ（墓場）において、幾度もジャッカルの足に踏みつけられています[16]。〔七・二三〕

かつて、微笑すれば燦めきがわずかに現れ出でて、愛する男たちの心を奪った〔美しい〕歯、その同じ歯が〔今や〕犬やカラスに腐った唇が食いちぎられて〔露出し〕、無残な姿になっています。〔七・二四〕

かつて、蜜蜂〔のような黒い瞳〕と睡蓮の花びら〔のような白目〕をそなえて魅力的であったその両目を見つめ、愛する男は歓喜したのに、〔今や〕鳥たちに肉と血を奪い取られた両目は、蛇たちの棲む穴のようになっています。〔七・二五〕

ずっと長い間、女友だちは皆でこの女の両頬の、蔓草の〔葉っぱの〕ように優美で柔らかな肌に、葉の装飾文様の化粧を施してあげたものですが、その両頬は今や骨が残るだけとなっています。あのマドゥーカの花のような〔頬っぺたの肌の〕白さはどこに行ったのでしょう。〔七・二六〕

かつて、快楽に目を細めた女のその両乳房は、愛しい男によって触られて鳥肌を立てたものでしたが、今や、血で赤黒く染まった犬たちの歯によって〔食い〕ちぎられています。〔七・二七〕

かつて、髪が乱れて〔差した〕花々が肩のところまでずり落ちた[17]、目を閉じた女を抱きしめながら、愛する

男は幸せに横になったのに、〔その彼は〕どうしてすぐに行って、墓場の大地というベッドに横たわっている、最愛の彼女を抱きしめてやらないのか。〔七・二八〕

(a)「女」と名づけられた、(b)おびただしい背徳の蛇に満ちている、(c)腱と骨と肉と血と内臓から出来ている塊である、嫌悪すべき事物に対して、実在しない妄想にとらわれた世の男たちは、空しく欲望をいだき続けています。〔七・二九〕

『女』という毒蔓が茂る密林をのがれ出て、『寂静』という果実がある苦行林に住む人々、彼らは悪人どもによる『侮辱的な扱い』という鋭い矢に〔心を〕貫かれることはありません。彼らこそは心が堅固に定まっている者です。彼らこそは寂静の幸せを味わう者です。〔七・三〇〕

◇　さて〔火葬の〕立ち昇る煙の塊がまるでユーパ（供犠のため犠牲獣をつなぐ支柱）であるかのようにみえる、その場所、―人間の脂肪がまるで儀式の供物・捧げ物であるかのように投入されて起こった、燃えさかる石炭の上のジュージューという音がしている場である、―始まったバンダカー鳥の鳴き声がまるで魔術者によるマントラ（真言）の誦唱であるかのように〔聞こえる〕場である、―墓場そのものが供犠であるかのようであるその場において、彼は鋭い刀によって〔自分の〕手足を切断し、蜜とギー（バターオイル）を〔身に〕塗って、

流れ続ける血に濡れた自分〔の体〕を、蟻たちに享受させながら、かの勝れた方（菩薩）はまるで自分で自分を〔供犠の〕犠牲獣にしたかのようでした。〔七・三一〕

◇　するとその場所に、まだらの斑点があって分厚い鎧のような穢い色の皮膚をした、また象の血がついたライオンの爪のように曲がって赤く鋭い嘴と、怒った蛇の目に似た目、そして鉄の棘のような鉤爪をもち、鋭い不快な声によって他の鳥たちを恐怖せしめつつ、堅固な羽の〔立てる〕音によって飛来したことがわかる、ウッチャンガマという名の鳥が〔来て〕、

その鳥は、不動のまま身体を山のように直立させているかの〔菩薩の〕肩の上に、すぐさま止まると、蓮の花びらのような眼を抉り取り、そして血だらけのまつげの筋を吐き捨てました。〔七・三二〕

〔ああ〕気づかいをなす〔母たる存在〕は、愛情により〔自分の〕仔を守るために、虎にすら立ち向かってゆくものですが、『憐れみの心』（悲）という〔あらゆる菩薩の〕母は、愛情深いにもかかわらず、なぜ、他の〔生類の〕益の実現のために〔自らの子である〕菩薩を〔かくも〕害して苦しめたのでしょうか。〔七・三三〕

◇　その時、その鳥は菩薩に言いました。「私に眼をくりぬかれて、きっとお前は大変な苦痛を味わっているに違いない。」

菩薩は答えました。「もし私の身体がどんな〔生き物の〕役にも立たずに滅びてゆくなら、私には苦しみがあることでしょう。しかし今このように無数の生き物によって〔身体が〕役立てられて（食べられて）ゆくのを見て、私は無上の歓びを感じています。

この身体というものは、〔あらゆる〕災厄が依拠する場ですが、しばしの間でも、もし生き物たちにとって役立つ手段となれば、〔それは〕宝石のように、偉大な者たちによって尊重されるものになります。さもなければ、〔この身体は〕毒蛇のごとく、多くの悪害をもつものとみなされます。」〔七・三四〕

◇　その時菩薩は「肉食獣たちは私を好きなように食べるがよい」と考えて、〔彼らにとっての〕餌食であるかのように、自分自身〔の体〕を示しました。

集中した短い叫び声が恐ろしい〔無数の〕鳥たちが集まり来て、彼の肉を徐々に減らしてゆきました。しかし〔菩薩の〕心の堅固さは、〔そのことを〕嫌うことはありませんでした。〔七・三五〕

その時、『徳性』という花の香りによって〔長年〕薫じられてきた彼の肉体から、生命力はようやく何とか離れ去ってゆきました。まるで巣のある一本の樹が倒れた時に、大変な狼狽を生じた鳥たちが〔しぶしぶ樹から〕

離れ去ってゆくように。〔七・三六〕

◇　その後、長く用いられたため汚れてきたジャスミンの花環を取り去るように、〔西の〕『日没山』の山頂から月を取り去って、『夜』という女が立ち去ってゆき、『夜明け』の手によって『東の山』の山頂に、まるでハイビスカスの花の花環が懸けられるように、太陽が懸けられた頃、―

『太陽光線』という手に触られ、気持ちよく〔光という香油を塗布され〕撫でさすられるうちに、蓮の茎の『棘』という体毛を立てて〔ぞくぞくした触感を感じながら〕『蓮池』という美女たちが目覚めた頃、―

ミサゴ鳥の鳴き声によく似た〔軋る〕音を発しながら都城の門が開かれた頃、菩薩の父は眠りから醒めて、不吉なことへの恐れに心をかき乱され、親友たちや付き人たちや親族と一緒に息子の捜索に必死になり、あれこれのことを想像しました。

「私の息子は夜中に散歩していて、毒蛇に咬まれてしまったのではあるまいか。あるいは無慈悲な盗賊たちによって装身具を奪われ、殺されてしまったのではないだろうか。あるいは〔象舎の〕柱を壊して〔脱走した〕王の象の、鉄の閂のような牙によって胸を打ち砕かれて、死者の王（閻魔）の都城に逝かせられてしまったのではないだろうか」と。〔七・三七〕

◇　彼ら〔捜索する〕人々は次第に近づいて、墓場の一隅において鷲たちに肉を食べられている菩薩を、何とかようやく〔本人であると〕識別すると、大商人に知らせました。「ああなんと、かの偉大な方は死亡されました。推測される限りでは、きっとあの方は獣たちにご自身〔の体〕をお与えになったのです」と。

その〔報せ〕を聞くと、斧に〔根本を〕切られた樹木のように、その資産家は地に倒れました。しばらく後に意識を取り戻すと、彼はひたすら歎き悲しみました。

「このように鷲どもに食い散らかされ、骨や腱が解けほどけた、この息子〔のさま〕を見せられながら、ああ、

運命の更なる残酷な振舞いによって、このような時でも、無情の頑なな心をもつため、私がなお生きているとは！〔七・三八〕

〔息子よ、お前の〕これほどの獣たちに対するその同情が、もし自分の体を与えることによって表されたのなら、どうしてお前は何の罪もない父である私を捨てて〔悲しませるという〕無慈悲さを望んだのか。〔七・三九〕

〔息子よ、これまで〕柔らかな枕があり、真っ白いシーツがある気持ちの良いベッドの上に快く横たわってきたのに、今日どうしてお前は此処で、灰をかぶった白骨だらけの火葬場というベッドの上に横たわっているのか。〔七・四〇〕

息子よ、お前が人々からひどく惜しまれつつ、自分の幸福を顧みず、憐れみの心と一緒に天界に立ち去ってしまったなら、私は今後、『徳ある人々の話』という花々をもって敬意が示される人々の会合において、〔お前以外の〕誰について、心を嬉しがせる〔褒め〕言葉を聞けばよいというのか。〔七・四一〕

〔息子よ、いつか私の死後に〕お前は悲しみながら一掬いの供え水を、涙もまじえて私のために供えてくれるだろうと私は思っていたのに、ああ愛しい者よ、お前はなぜ、そのやさしい愛情に満ちた澄んだ心にもかかわらず、その私の願いを打ち砕いてしまったのか。」〔七・四二〕

◇　このように資産家は長く嘆いて、菩薩の遺体に対して火葬を行い、流れ出た涙によって洗い清められた顔で(18)、まるで虚ろになったかのように、呻き声をあげながら、自分の屋敷に去ってゆきました。

〔その時、神々の都がある〕メール山（須弥山）では黄金の鉦・どら・太鼓が打ち鳴らされて、全方角に叢林の上に音が響きわたり、神々の群は火が消え鎮まった(19)菩薩の遺骨の小山の上に、よい香りがする花々を雨のように撒きました。〔七・四三〕

◇　さあ、このように、かの世尊は菩薩行をなしつつ、利他のために幾度も自分を捨てたのです。このことを思い、

仏・世尊に対して最高の浄信を捧げるべきです。

『資産家〔の子〕ジャータカ』、第七話〔終わる〕。

第八話　蓮華王（パドマカ）ジャータカ[20]

菩薩は利他を達成するために、一本の草のように〔惜しげなく〕その身体を捨てました。他者の幸せを実現しようとする心堅固な者たちは、自分の幸せを顧慮しないのです。〔八・一〕

◇　このように伝え聞いています。―　(a)秋になって雨雲の群が消えた天空における、月のような方、(b)満月の円輪からの光線に照らされる夜における、〔夜咲きの〕睡蓮の叢の開花のような方、(c)歓喜林（娯楽用の園林）の地における、蓮池のような方、(d)青春の盛りにおける、立派な訓育のような方、(e)明瞭で耳に快い字音・単語からなる発話における、〔話の〕意味のような方、(f)燦めく宝玉のような歯の光線の照耀によって荘厳された蓮華のごとき顔をおもちになる方たる、パドマカ（蓮華）という名の王が、(a)秋の月光のように遠くまで伸びている清らかな水があり、(b)鮮やかに見える魚たちの群に満ち、(c)岸辺にある樹々の花〔から落ちる〕花粉によって黄褐色に染められた泡の列が〔女の〕腰帯の紐のように見える、ヴァラーナサー川により〔その身を装身具として〕飾っている、生粋の美人のごとき王都ヴァーラーナシー（ベナレス）において、菩薩（釈尊の前世）として、おりました。

その美によって見る人々を爽やかに愉楽せしめること、月の如く、また容姿によって人々の心をうっとり幻惑すること、カーマ神（愛の神）の如く、また威光によって人々を熱く照らすこと、太陽の如き、その王は、それら（月・カーマ神・太陽）を同時に、気にも留めずに、凌駕していました[21]。〔八・二〕

鳥たちは果実がある一本の樹のもとで〔幸せであり〕、蜜蜂たちは蓮池の沢山の蓮のもとで〔幸せであり〕、乞

う人々はその王のもとで、まるで世界で唯一の近親者である心友のもとにいるかのように幸せでした。〔八・三〕

生類を益する仕事の達成に努力し、憐れみを強くいだくことによって清められた知性をもつ、その王の心に、慳貪（物惜しみの心）は入り込むことはありませんでした。真言で守護された家には蛇が入り込めないように。〔八・四〕

その王の、(a)慳貪を追い払う、(b)決然たることにおいて偉大で、(c)世に知れわたった、その布施〔の行為〕によって、〔国土の〕全方角の空間が満たされた時、乞う人々の「ください」という、人の軽侮を招く言葉は、もう世間で聞かれることはありませんでした。〔八・五〕

(a)『施捨』という山頂のある、『心』という雪山（ヒマーラヤ）から発して〔流れ下り〕、(b)すべての人を沐浴させ、汚れを取りさる、(c)月光のように清らかな、『名声』というガンガー河（ガンジス）の中に、あらゆる生き物から敬意を受け、利他行をひたすら行う、その王は深く浸かりました。〔八・六〕

「今、誰の不幸を取り除いてあげようか。財〔を施すこと〕によって誰を喜ばせてあげようか。誰を幸せに至る道に立たせてあげようか。」――これがその王の恒常的なあり方でした。〔八・七〕

〔輪廻的〕生存を断ち切るため、正しい道に自分自身を立脚させようと願う、偉大な心の者たちには、利他行以外に、他になすべきいかなる活動もないのです。〔八・八〕

その強くて敵に勝利する王がもつ軍隊は、まるで盛り上がって高さが増大した海の水が浜辺の果てに押し寄せるように、腕（武力）と勇敢さに敗れた他の国へと押し寄せました。〔八・九〕（＝二〇・二）

音を轟かせて次々に続くドラム（戦鼓）の音に怒りをたぎらせた、その王に属する象たちは、一斉進撃の時に、辛うじて、鉤棒をもった御者たち〔の攻撃命令〕に従順になりました。〔八・一〇〕（＝二〇・三）

敵たちは恐怖のあまり、〔戦闘の〕熱狂的気分の発生が消え失せ[22]、刀や弓を握る力が緩みました。ライオン

がもつ矜持に象たちが抗することが出来ないように、彼らは戦闘において、その王の矜持に抗することが出来ませんでした。〔八・一一〕

鳥たちが安らぎを求めて、いつも一本の果実ある樹木のもとで憩いを得るように、人々は安らぎを求めて、大きな威光を拡げたその王のもとでいつも憩いを得ました、〔誰もが〕相互に要望と幸福感とが増大させた繁栄を得て。〔八・一二〕

◇　さて或る時、その王の国において、(a)体の〔三〕要素の均衡[23]が崩れたために腹中の火が次第に増し、(b)日々身体が青白くなって体力が失せ、(c)精気が無くなる、重い病に人々が冒されました。菩薩の命令により、医者たちが熱意をもって治療をしましたが、その人たちからその病を取り除くことが出来ませんでした。そこでかの王は医者たちに尋ねました。「いかなる手段によって、これらの人々から病を取り除くことが出来るのか。」

医者たちは答えました。「王よ、もしローヒータ魚（大赤魚）の肉がありさえすれば、わたしたちはこの人々を健康にすることができるでしょう。」―そこでかの王は懸命に手を尽くしましたが、どこからもローヒータ魚を得ることが出来ませんでした。

その後、或る時、かの王は象の肩の上に乗り、白い日傘で日射を防ぎ、払子の揺動に服を震わせながら、〔城の〕外に出ました。〔八・一三〕

家臣たちを従えて象王の肩に乗ったその王を見ると、すぐさま病人たちが哀れな顔で、両手を差し上げながら、「王様、どうか私たちを病からお救いください」と、言葉を発しました。〔八・一四〕

◇　菩薩（王）は、心を取り乱している彼ら病人たちの痛ましい叫び声を聞いて、憐れみが募るあまり、その心は苦しみで満たされ、またその目は溢れ出る涙で覆われて、次のように考えました。「わが領土に住む人たちがこのような〔悲惨な〕状況に陥っているのに、王位における私の幸せなど、何の意味があるのだろうか。」

宮殿に入ると、大臣たちを呼び寄せ、次の様に言いました。「私は長男に灌頂（国王即位の儀式）を行うことを欲する。」―すると大臣たちは尋ねました。

「あなた様はまだ若さによる、がっしりとした身体をおもちであり、敵たちを粉砕する勇猛さもあり、利他をもたらす〔王家の〕繁栄もあるというのに、どうして不適切な時に〔王位を退き〕森に去ろうと望まれるのでしょうか。」〔八・一五〕

◇　王は言いました。「あなた方が思っている、そのような〔理由〕ではない。」―大臣たちは更に尋ねました。「閣下が意図される所はいかなるものですか。」―王は答えました。「悪夢を見たため、不安に襲われた私は、次のように考えている、『いつかそのうち、思いもしなかったあの『無常性』がやって来て、私を滅ぼすであろう』と。それ故、私は息子が灌頂されるのを見たいのだ。」―大臣たちは答えました。「閣下のご命令のとおりに。」

その後 (a) 高く聳える黄金の塔門があり、(b) 最高級のトゥーリヤ打楽器の力強い鮮やかな音が鳴り響く、壮麗な宮殿において、〔他の〕王たちから敬礼されながら、息子を愛する王は、その息子に灌頂を行いました。〔八・一六〕

◇　その後、その王子は父のもとに行き、尋ねました。「父上、どうかご教示ください。私はどのように〔王として〕行動すべきでしょうか。」―王は答えました。「いとしい子よ、聞きなさい。どんな時でもおまえは、乞いに来た者たちに対して敬意を欠いてはならない[24]。〔次の点を〕考慮しなさい。

強欲に〔目が眩んで〕盲目になっている者たちがもつ慳貪（もの惜しみの心）こそは、〔世の人々の〕非難の原因であり、また善い世界（善趣）に再生することを妨げるものである。〔それは〕『渇愛』という鬼女の〔棲む〕荒廃した無人の家であり、至福へ渡る橋を破壊する水流であり、〔真の〕仇敵である。〔八・一七〕

自分の所有財に執着した賤しい者たちは、『慳貪』という火によって、まず初めに自分自身を焼いてから、『つ

り上げた眉』という炎を燃焼させながら〔発する〕『無いよ！』という激しい言葉によって、遂には、乞いに来た者をも焼く。〔八・一八〕

賢者たち、また気高い生まれの者たち、聖者たち、また次の生に悪い世界（悪趣）を見ることがない者たち、―彼らは自分自身を、苦の原因である『慳貪』という毒蛇が〔巣くう〕蟻塚の如きものにしてしまうことはない。〔八・一九〕

金満家であっても、〔乞う者たちの求めを〕拒絶する、塵（煩悩）で穢れた卑しい言葉をもし語ったならば、期待を裏切ったその人を、乞う人々は遠く避けるようになる。旅人たちは、たとえ渇きによって口中が乾ききっていても、不可触民の家の門にある井戸の穢れた水では、沐浴したり飲んだりすることはない。〔八・二〇〕

深く眼窩が落ち窪み、長い髭によって顔が闇のように覆われてしまっている〔盲目の〕餓鬼たちは、水を乞い求めながら、棍棒を掴んだ男たち（獄卒）によって追い払われているが、それは〔生前の〕慳貪の果報であることを、真理を知り、生ける者たちの親密な友である、勝者（仏）はお説きになった。そのことを熟慮して、ひとは他者を助けることを嫌がるような考えをしてはならない。〔八・二二〕

◇

さらにまた、いとしい子よ。お前が世の人々からの尊敬を願うなら、自分自身を正直・施し・堪忍・親切等の『徳性』という宝石をもって飾りなさい。

(a)徳性を高めつつあり、(b)〔自己を制御して〕鎮めており、(c)人々にとって害悪であるものを断絶させることが出来、(d)徳ある人々との友情を育み、(e)賢く、(f)親切で正直な言葉を話し、(g)美と繁栄の女神（ラクシュミー）によって抱きしめられ、(h)傲慢さという〔心の〕錆びによって汚れていない、善き人であるならば、人々によって、人物評価の最高位に置かれるだろう。〔八・二三〕

指導者としての梶棒を担いながら、あらゆる人々の悩苦や疲れを取り去ってやり、その思考は明澄であって、

宝石の種々の輝きのように闇愚を離れた輝きを放ち、また乞う人々のために〔おのが〕命を懸けてまで親切をなすことを願う者であるなら、徳ある人々の中で、人物評価の最高位に置かれないことがどうしてあろうか。〔八・二三〕

◇　お前は凡俗の人がするように、徳ある人々に対して敬意が欠けるようであってはいけない。次の点を考慮しなさい。

まるで徳ある客人の到来を見たかのように、海は月〔の出〕を見て、しばらくの間、水の増大（満潮）によって敬意を示す。しかし湖沼の水は、それ（月）が昇っても、増大することはない。〔このように〕偉大な人〔との出会い〕において、偉大な人々にのみ、〔歓迎の〕喜びが現れるのだ。」〔八・二四〕

◇　さて、空が徐々に光を増した星々で彩られ、東の方角の空間〔という女の額〕に月という額飾りが作られる時、―

蛾の群が落下しては揺れ動くランプの焔の〔威嚇する〕指に脅されたかのように、降り始めの雨水のような青黒い輝きをもつ暗闇が家々の内部から逃れ去る時、―

鶏たちが止まり木に止まってじっと身動きせずにいる時、―

離れの寝室が沈水香の香りによって薫じられ、〔その部屋の〕柔らかなベッドの上が、塗香を〔肌に〕擦り込む動作によって絶えず動かされるたびにかすかに鳴る腕輪に美しく飾られた蓮華のような手をもつ女たちによって占められる時、―

屋台が並んだ市場の路上のどこかで、ちらほらとまばらに人々が売り買いをするだけになる時、菩薩は息子に〔王の生き方を〕説き示した後、ランプの輝きに照らされている絵画が美しい、宮殿の最上階に上がって、後宮のあらゆる女たちを部屋から退出させ、〔今や〕かのヴァーラーナサー川の中に自分〔の命〕を捨てようと願い、次の様に〔自分に向かって〕語りました。

「白く輝く宝石のように清らかな水をもつこの川で、人々の病を鎮めるため、巨きな体をもつローヒータ魚に私はなろう。」〔八・二五〕

こう〔誓って〕王は、民衆のため繁栄を増進させてきたその、多くの徳性をそなえ、格別の憐憫の心に似合った〔美しい〕体を、―彼の衣服は〔風に〕翻り、乱れて―、ヴァラーナサー川に投げました。〔八・二六〕

その王は、自分の宮殿から水へと落ちながら、きらり輝きました。まるでスメール山の斜面から、インドラ神の象の牙が突き揺さぶった一本の如意樹（神話的な樹）が〔落下する〕ように。〔八・二七〕

その真っ白な衣が乱れ、風にはためいて、王が落ちると、〔驚いて〕激しく動くシャパリー魚[25]の群がいる、〔川の〕水は、〔押し寄せる波で〕チャクラヴァーカ鳥たち（オシドリに似た鳥）を動揺させながら、岸辺に飛び上がりました。〔八・二八〕

その川に落ちた時に起きた水音はぞっとするほど物凄いものでしたが、たちまちその王は雪山（ヒマーラヤ）の嶺に似た〔巨大な〕体のローヒータ魚に〔生まれ〕変わりました。〔八・二九〕

◇　かの偉大な方は、白い砂が美しい砂州に上がると、「この民衆がもし〔病を治すため〕私の命を奪うことになれば、彼らは悪業の果に繋がれて、悪い再生の世界（悪趣）の運命を免れることが出来なくなる。それ故、今が命終すべき時であり、自分ですべての器官〔の活動〕を止滅し、命を捨てよう」と考えて、命（生命力）を捨てました。

さて濁った泥水を注ぎかけられた白象の〔円い〕額のようである月が『日没山』の頂（西の地平線）に懸かり、微細な塵にうっすら覆われた水晶の宝石に似た星々がまばらに点在する〔夜明けの〕時、―

夜睡蓮の群が花びらを閉じ、昼睡蓮の群の花々が目覚めて開きつつある時、―

雄黄（レモン色の顔料）の液が振りかけられたかのように〔夜明けの〕幼い太陽光線が山の峰々の上に注がれる時、寝台に王がいないことを寝屋を見張る女官たちから知らされた大臣たちは、「では王様はどこに行かれたのだろう」

と〔不安に駆られて〕、宮殿の近くにあるすべての林苑を見ながら、あたりを隈無く巡り歩くうちに、ヴァラーナサー川の砂州において、真珠の集積の山が横に長く延びるかのような〔姿である〕ローヒータ魚を見ました。すると彼らは虚空にいて体が不可視なる神の、〔次のような〕重々しい声を聞きました。

「これらの民の疾病の苦しみを断つため、かの王は河水にわが身を捨てて、ローヒータ魚になられたのだ。」〔八・三〇〕

◇　かれら大臣たちはその〔声〕を聞いて、悲しみの苦痛のあまり心を取り乱し、このように言いました。「ああ、人々の益のために王様にご自身を捨てさせた憐れみの心が、この国土すべてから守護者を奪ってしまったのだ。」

さまざまにこのようにうめき嘆いて、空ろになった心で、自分たちの住まいに戻りました。

かの王についてのその報せを大臣たちから受けて、王妃は取り乱し、涙を流しながら〔次のようにつぶやき〕嘆き悲しみました。〔八・三一〕

「ああ、どんな人にも親縁者のように〔親切で〕あったあなたについて、『あの王様はご自分で天界にゆかれたのです』と〔報告するのを〕聞いた後でも、それでも、底なしの苦しみを味わっている私を、生き続けようとする意志が、なお手放すまいとしています。〔八・三二〕

〔人々への〕憐愍によってやさしい心をおもちのあなたは、敵に対してすら一度も厳しい気持ち（敵愾心）を抱かなかったのに、〔あなたに〕従い、〔あなたを〕慕うこのわたしを、罪もないのに、どうして捨てて、あなたは行っておしまいになったのでしょう。〔八・三三〕

若い女たちを〔女官として〕持たれているあなたは、『ああ、怒っているひと、ひどく怒るのをやめなさい』と〔私に〕言って、根拠のない嫉妬のために怒って下を向いている私をやさしく慰撫してくれましたが、あなたがいなくなった今では、誰がやって来て、そうしてくれるのでしょうか。〔八・三四〕

〔あなた以外に〕誰が、化粧室に〔やって来て〕とどまり、耳のところに咲いたばかりの新しい青蓮を挿してくれて、うねる巻き髪を可愛らしくしてくれて、私の額飾りを徐々に〔塗って〕美しく仕上げてくれるのでしょうか。〔八・三五〕

このリュート[26]は、まるで一人の愛される女のように、私の愛しい人（王）によって、膝の上に置かれて、愛撫され、ラーガ（情欲、音楽の旋法）を奏でるものにされました。今はもう彼がいないので、〔このリュートは〕これからずっと、まるで瞑想に耽っている一羽の水鳥のようになるでしょう。〔八・三六〕

この鏡は、あの方の顔の月のような美を映した時には、一本の蓮華が立つ水面〔がそこにあるか〕のような〔美しい〕相似を得ました。ああ、〔彼を失ったことを〕悲しむかのように、その同じ鏡は〔これから輝きを失った〕夜明けの月の姿のようになることでしょう。〔八・三七〕

鸚鵡よ、鳥かごの中にいるお前に〔いつも〕きれいな熟したジャンブ樹の実を与えていた、私の愛しい人がいなくなってしまったので、アカシアの花をまるで頭飾りにつけたかのようなお前に、今日から、誰が言葉をとなえさせるのでしょうか。〔八・三八〕

親しい人たちとの繋がりを捨てて、行ってしまったあの愛しい人には、私の豊かな黒髪はもう必要なくなりました。〔ですから〕今日、私の後家としての規則を示すものであるこのひっつめ髪に〔黒髪を〕編まないことはもう永くいつまでもありません。」〔八・三九〕

後宮の美しい女たちは、このように、王妃がお嘆きになった言葉を聞くと、〔悲しみのあまり〕たちまち鏡を見ることへの熱意を捨て、美しい装飾の腰帯を捨てました。〔八・四〇〕

〔王妃のその言葉を聞くと〕目に塗墨をつけることに熱心だった或る女は悲しんで、涙を浮かべ、ちょうど目尻に差していた筆をすぐに捨て、半分出来上がっていた額飾りをも拭い去りました。〔八・四一〕

別の一人の女性は泣いて歎くあまり、満開のバクラ（ミサキノハナ）の花環を〔自分の〕髪から取り去り、また葯嚢が破れて〔花粉で〕黄色い、よい香りのするマンゴーの花房を捨てました。〔八・四二〕

他の女たちは〔床に〕倒れ伏しました。―花鬘や装飾は転げ、衣は乱れ、髪の房はねじれて入り乱れた〔有様で〕。それはまるで、〔天界の〕美しい如意曼樹が世界終末の風に打たれて倒れ、〔その上を〕蜜蜂たちが飛び回るかのようでした。〔八・四三〕

また或る女たちは、侍女たちから王様が亡くなったことを聞くと、目に涙を溜めて、まるで風にかき乱された夕べの蓮池の蓮たちのように地に倒れ、〔花びらのような〕目を閉じました。〔八・四四〕

或る一人の女は、〔美しさの〕評判が月をも凌駕して侍臣たちに見つめられている、あの王〔のかつての姿〕を、ゆっくり静かに〔筆で〕描いてから、絶望のあまり大声で泣いて、膝の上に置いていた画板を数本の筆と一緒に〔投げ〕捨てました。〔八・四五〕

或る若い女たちは、〔頭の花環の〕ひもが千切れてあちこちばらけた満開の花に覆われた芳香ある〔自分の〕髪の毛を引きむしり、壊れてしまった腕輪のある、紅蓮のように赤くなった両手で、何度も胸を叩いていました。〔八・四六〕

◇　彼ら大臣たちは、悲しみに涙を滴らせながら哀れにむせび泣いている王の長男に、一掬いの葬礼の供え水をあげさせ、また後宮のそれらの女たちをどうにか慰めてから、病に冒されて苦しむ民に語りかけました。「あの王様の遺志を実行しなさい。そのことによって、あの王様は供養されたことになるのです。」

それらの民衆は刀でそのローヒータ魚の肉を切り取って持って帰り、医者たちの教える方法に従って服用し、そのことによって病から解放されました。

―さあ、このように、かの世尊は菩薩であった時、生類を益するために難行をされたのです。そのことを考える

なら、大きな憐れみの心をおもちのかの世尊・仏に対して、心ある者の誰が、強い信心を抱かずにいられましょうか。

『蓮華王（パドマカ）ジャータカ』、第八話〔終わる〕。

第一一話　鹿ジャータカ（Ⅰ）[27]

◇　このように伝え聞いています。―(a)とても澄んだ水のせいで、まるで月光が液状化したかのような、(b)柔らかな風によって動かされる波の群があり、(c)オシドリの夫婦によって飾られた岸辺をもつ、ヴァラーナサー河によって飾られた或る山の内奥の地において、(a)様々な樹々の影が湖の水を覆い、(b)また柔らかな草やぶによって緑になっている地がある、或る森に、鹿の群のかしらとして、菩薩（前世の釈尊）がおりました。

乳海（創造神話の始源の海）の泡のように真っ白ですらりとしたお腹により、また蜜蜂の群のように黒色をした背中によって、〔その鹿のかしらの姿は〕(a)まるで瞳に〔無数の〕燦めきの斑点があり、(b)震えるまつげの先端をもつ、(c)森の奥の場所より〔現れた〕、流し目をしたひとつの眼のように輝いて見えました。〔一一・二〕

◇　そのようであるかの菩薩に、容姿の美しさの程で多少は追随しているデーヴァダッタ（前世でも釈尊の対抗者として出てくる悪役）は、その〔地域の〕近隣にいる、あまり大きな数ではない鹿の群を治める〔鹿の〕王でした。

これら二匹のかしらの統治によって守られた二つの群は、草を食みつつ、恐れなく安心して生活していました。〔一一・三〕

◇　或る時、狩猟という悪徳を習慣にしたブラフマダッタという王が、ヴァーラーナシーから〔猟に〕出かけました。

(a)弓を斜めに胸の上につけて、(b)すばらしい馬に乗り、(c)似た〔装備の〕お供を引き連れ、(d)眼のまつげが馬たちのひずめが巻き起こす埃で汚れ、(e)額のところが太陽の焦熱から生じた汗のしずくに覆われた王は、(a)軍の〔立てる〕物音に怖がって飛び上がった孔雀・ヤマウズラ・チャコーラ鳥・野生の鶏がいる、(b)平坦でなく高かったり低かったりする土地がある、(c)またあちこちで歩兵の歩みに驚かされた鹿たちの蹄が〔水中に〕踏み下ろされて慄えわななく小魚たちの群が逃れ去る川の岸辺の水がある、(d)発情した象王が額を擦りつけることで染み込んだマダ（発情液）の香りがついた樹の幹の近くを飛び回っている蜜蜂の群がいる、(e)また岸辺の樹々の枝にくっついている干涸らびたカクバやアクシャの実やらマドグ水鳥や鷺たちの尾羽やらが混じりあうカーシャ草やクシャ草や竹の茎や葉の集積〔の存在〕によってずいぶん前に山の河流が溢れた洪水が過ぎ去ったことが示されている、(f)また沼の泥にはまり込んだ虎の足跡がある、(g)また熟したウドゥンバラ（イチジクの一種）の香りが染みついた稠林があり、(h)また風に動かされた細長い旗のようにジグザグな形に曲がった蛇たちの〔這った〕跡によって道標が付けられた山道の塵がある、〔そのような光景の〕森の内部を観ながら、

少し奥に進み行くと、〔さっそく〕安心した状態にいたその二つの鹿の群を、軍で包囲させました。

その時、揺れるくつわによって騒音を立てる、弓を手にした軍を見て、恐怖のあまり群は散り散りになって、鹿たちはよりどころ無く、逃げ回りました。〔二一・四〕

王の軍によって鹿たちが八方から囲まれたのを見て、かの菩薩（鹿の王）は、遠くで矢筒から矢を抜きつつある王に近づき、語りかけました。〔二一・五〕

「どうして一斉に鹿たちを滅ぼそうとして、あなたはその弓に矢をつがえるのですか。私は毎日あなたの〔宮殿

の〕台所に一匹ずつ鹿をゆかせることにしましょう。」〔二一・六〕

すると王は彼に答えました。「鹿よ、それが真実であれば、私はそのとおりにするであろう。しかしこの取り決めをもしあなたが実行しない時は、後に私は再びまた鹿たちを攻撃するであろう。」〔二一・七〕

〔そう〕約束して、王が白傘蓋で太陽からの熱苦を防ぎながら、立ち去った後、再び一つの場所に集合したその鹿たちに菩薩は近づいて、言いました。〔二一・八〕

「一挙に全滅しそうな状況において、もし別に〔それを回避できる〕やり方が得られるなら、それでよい。平和〔に暮らす〕原因となるそのやり方を、しばらくずっと用いることで、いつか他の〔もっとよい状況〕が現れるでしょう。〔二一・九〕

象の額の隆起を引き裂くことに長けた、力あるライオンたちの命すら、〔彼らを〕敵視する王たちは、矢をもって滅ぼすのです。まして、森で草の葉先を食べている鹿たちは問題になりません。〔二一・一〇〕

真白な宝玉のように燦めく光線をもって、黒闇を打ち砕く月は、世界の生き物を照らしてから、美しさを失いつつ、『日没山』（西の地平線）に沈んでゆきます。あらゆる存在は瞬時にもろく滅びてゆくのです。〔二一・一一〕

激烈な素早さでガルダ鳥（金翅鳥）は大波が立つ水をかき乱して、海中からナーガ（龍）を奪い取ります。〔そのように〕何者も ―― どんな達人でも、世に知られた偉大な力の者であっても ―― 前世の業の異熟〔の襲来〕を免れることはできないのです。〔二一・一二〕

このような業の動きを知って、知性の鋭い、堅固な心をもつ賢者たちは、命が失われる時にも、落胆するにいたることはありません。」〔二一・一三〕

◇

さて群のかしらである二頭の指示により、毎日かの王の食事を料理する時間になると、彼らの群から鹿が一匹ずつ〔宮殿の〕台所に行きました。そのようにして何日もが過ぎた時、デーヴァダッタの群にいる一匹の妊娠した

雌鹿に、行く番が回ってきました。すると彼女は自分の群のかしらのところに行って、言いました。「鹿王さま、間違いなく明日、私は出産しそうです。それゆえ、産んでから、森に鹿の赤ちゃんを置いて、私は〔台所に〕行くことにします。私が其処で死ぬのはよいのです、しかしお腹にいるこの子と一緒には行けません。」―群のかしらであるデーヴァダッタは答えました。「では他のどの鹿が行くというのか、お前の番が来たというのに。絶対にお前自身が行かなければならない。私の命令に背くとは、お前は身の程をわきまえない奴だ。」―その鹿のかしらから罵られたその雌鹿は、引き下がりながら、考えました。「別の鹿の群のかしらである方は、とても憐れみ深いお方だ。それ故、今はあの方にお願いしましょう。」

〔彼女は〕行って、菩薩に言いました。

「群のかしらよ、王の宮殿にゆく順番が私に来たのですが、私は出産間近なのです。それゆえ、この子をお護りください。〔一一・一四〕

生まれたばかりの、眼をきょろきょろさせて踞っている子を私は舌で舐め、乳房で〔お乳を〕飲ませてやり、〔一一・一五〕

森の奥で、貝殻のかけらのような色をした、芽のような〔小さな〕歯で、若草の先端に触っている、目の前にいる〔わが子〕を見た後、〔一一・一六〕

私の群には妹がいますので、彼女に子供を預けてから、群のかしらよ、目的を遂げた私は〔台所へ〕行きます。」〔一一・一七〕

このように語った、子〔の誕生〕を希求するその雌鹿を見て、群のかしらの心はとても憐れみで一杯になりました。〔一一・一八〕

苦しむ者に対して、それが見知らぬ者であっても、気高い者の憐れみは激しく増大するものです。あたかも水

に湿った網状の根をもつ蔓草が、樹にぴったり抱きつくように。〔二一・一九〕

庇護に求めて頼ってきた不幸な者を見て、憐れみをいだいた者こそが、その者の災いを滅ぼすために、最大の努力をなすのです。〔二一・二〇〕

その時鹿の群のかしらはその雌鹿に言いました。「よきご婦人よ、〔あなたの〕心に満ちている悲しみを捨てなさい。あなたは〔ここに〕留まっていなさい、〔子と〕完全な幸福に浸り、森の中を歩きながら。私が自ら、王の宮殿に行きます。〔二一・二二〕

(a)生えたばかりのアカシアの緑いろの葉っぱを噛んだり、(b)まるで月光の集積のように浄らかな水を飲んだり、(c)ここで〔他の〕鹿の子たちと一緒に遊んだりしている、(d)きょろきょろした目の、〔あなたの〕幼子を、〔あなたは〕いつまでも観ていなさい。」〔二一・二三〕

そのように〔言って〕、かの心堅固な者（群のかしら）は雌鹿を安心させてから、〔誓願を〕語りました。「今日、私がこの雌鹿を死から救ったように、同じ様に、私は〔いつか〕マーラ（魔）に打ち勝つ悟りを得て、輪廻によって作られる苦しみから生類を救うことができますように。」〔二一・二三〕

◇　このように語ってから、(a)〔地面に伏せた鹿たちの〕腹が置かれたことで熱がこもった、(b)〔彼らの〕蹄が〔踏んで〕掘り起こした塵埃のある、(c)また鹿たちが反芻して吐き出したナツメの実の種が周辺に積み重なっている、〔群が〕滞在している場所の前で、その群のかしらは立ち上がって、悲しむ〔鹿たちの〕群に追随されながら、ヴァーラーナシーに向かって出発しました。

(a)開いた花々があり、(b)蜜蜂たちの拡がる甘い羽音に充ち満ち、(c)風によって『枝の先』という手を震わせている、山の樹々は、彼を引き留めようとするかのようでした。〔二一・二四〕

(a)親友であるその鹿を失おうとしているかのように、(b)風に打たれて揺れている小枝があり、(c)至るところ

に拡がったコオロギの音をもつ、その森は、心配して悲しみ、泣いているかのようでした。〔一一・二五〕

◇　菩薩はヴァーラーナシーの近くに来た時、少しの間歩みを止めて、その鹿の群にむかって語りました。「今ここで、引き返しなさい。世界において一緒になったものは〔すべて〕容易く分離するものです。

本性上移り気な『美』は、春の季節には美しい蓮の群に久しく留まっていますが、冬の季節には花弁・花糸・花托が萎れて香りを失った〔蓮の群〕を捨てて立ち去ってしまいます。〔夏になると〕雨期の間は雲という衣に包まれていて〔見えなかった〕『空の諸方の空間』という女たちの顔を輝きで照らして、踊りも見せてくれたのに、つかのまの輝きをもつ〔彼女たち〕稲妻は、まるで情欲が冷めた娼家の女たちが財産を蕩尽した愛人たちを捨て去るように、秋の季節に、雨水を流して軽くなった雨雲たちを捨て去ります。

夜〔という女神〕の顔にある額飾りである月ですら、夜明けになると、生来の『美』から見捨てられます。世界には互いに別れることがないものなど、全く何一つ存在しません。このように考えて、あなた方は法に専念しながら、正しく自己を護るべきです。」

その鹿の群は〔そこに〕立ったまま、菩薩が視界から消えるまで見つめてから、まるで父親と別れたかのように、悲しみという矢に傷ついた心をいだいたまま、空虚に見える森に戻りました。

さて菩薩は、(a)鹿・猪・水牛・山羊の骨が山と積まれている場所を離れようとしない犬の群の喧騒が恐ろしく〔響く〕、(b)飛び立ったり降りたりしている蠅がいっぱい〔たかった〕肉の塊がある、(c)鋭い包丁が置かれていて、(d)鹿がやって来るのを待ち受けている屠殺人たちがぎっしりいる、屠殺場にやって来ると、立ち止まりました。

彼の屠殺をとりしきるその男たちは、〔鹿の〕群のかしらをとらえて、王に見せました。

鹿を見た王は、かの鹿に尋ねました。「群が全滅していないのに、あなたはなぜ自ら来られたのか、話しなさい。」〔一一・二六〕

◇　菩薩は答えました。

「王よ、妊娠した雌鹿が私に救いを求めて来ました。子を見たいと願っている彼女の番に、〔代わりに〕私が来たのです。〔二一・二七〕

わが子を見たいと望んでいる、その雌鹿の希望を満たすことができて、私はこの上なく喜んでいます。私は死を祝祭（歓喜の祝い）と見なします。〔二一・二八〕

〔これまで〕雌鹿や雄鹿が死ぬために此処へ行くのを見て、私には苦しみがありましたが、その〔苦しみが〕今やもうありません。〔二一・二九〕

それ故、王よ、さあ今、私を屠畜人たちによって殺させてください。お命じになってください。王よ、何を躊躇っておられるのですか。『憐れみ』という巨大な鎧をつけた私の心を、『意気阻喪』という矢が突き通すことはないのです。」〔二一・三〇〕

◇　かの王は驚愕した思いで、その〔鹿〕がもっている、利他の行為を行うことに鋭敏である憐れみの心を洞察すると、羞恥心に捉われたかのように、菩薩に語りました。「何とすばらしいことでしょう、群のかしらよ。

利他を達成しようと懸命な心をもつあなたは、鹿の姿をしていますが、人間の最高者です。〔逆に〕他者を害しようと懸命に努力する私たちはまったく野獣と同じです。」〔二一・三二〕

◇　その時、菩薩は王が後悔しているのを理解し、信頼の思いを起こした顔をした〔王に〕、次の様に言いました。

「あなたは〔自分に〕保護を求めに来た者には、罪を犯した敵であっても、怒りを捨てて、保護をなさると聞きました。おっしゃってください。罪のない鹿たちの上に、あなたの鋭い矢が射かけられているのは、なぜなのですか。〔二一・三三〕

戦場においてあなたは、背中を向けて逃げる者には、仇敵であっても攻撃しません。どうしてあなたは恐怖に

おびえて逃げ去る鹿たちを攻撃するのですか。〔一一・三三〕

誤った思考（妄分別）が煽り立てている、狩猟という娯楽をやめなさい。それは〔来世で〕地獄の火に捧げられて、焔を激しく燃え立たせるであろう供物になります。」〔一一・三四〕

◇　王は悦んだ心で、その群のかしらを大きな王座に昇らせてから、恭しく下の座に坐り、言いました。「ああどうか、暗愚の闇を追い払う、法の教示たる『善説』（すぐれた言葉）を私にお示し下さい。」

すると菩薩は、王の願いを聞き入れて、すべての王の徒衆に見つめられながら、次の様に語りました。

「『教えの詩』（善説）を好み、栄光によって高慢にならず、他者に利を得させることに最も適した行動をし、もろもろの徳性〔を集めること〕に飽きることなく、徳性をもつ者たちに敬意を示す――これが、偉大な者たちがそなえる、成熟した振舞です。〔一一・三五〕

甚だはっきりと気高い光輝を放っている、人間にとって『人間たるしるし（標識）』たるところの、二つのものがあります。〔一に〕心の尊厳を保つことにより、不幸の中にあっても、みじめな気持ちにならないこと。〔二に〕聖者たちの道を指し示す、『愧じる心』です。〔一一・三六〕

俗悪な人々は本性上けがらわしい心をもち、無用に他の者たちが〔犯す〕不名誉を監視しています。しかし賢者たちは、知性というものを自分の心の清浄さの上に置いており、彼ら（凡俗の人々）に対して、はなはだ同情的です。〔一一・三七〕

社会的成功と雄々しい仕事とが等しい〔高みにある〕人々においてすら、なす行為はすべての他者を益するものではありません。雲なき天空は〔沢山の〕燦めく星々をもちますが、アガスティヤ星（カノープス星）のみが水から毒を消します（地上のあらゆる水を浄めます）。〔一一・三八〕

高貴なる人々は、〔周囲に〕ふりまく善行によって、〔彼らのことを〕考えただけでも、驚異の念を引き起こし

ます。彼らが人々の視界に入るとき、あたかも〔ふりまかれた〕不死の甘露（アムリタ）によるかのように、〔人々の〕心を〔浄め〕濡らすのです。〔二一・三九〕

『他者への助け』という長い〔善行の〕水流を途切らすことない人、また『智慧』という眼が〔暗愚の〕闇から離れている人、―それら二者だけは、〔輪廻の長夜において〕目覚めています。しかしそうではない者たち、〔すなわち〕家畜のような生き方をする者、利他の活動に関して〔理解できない〕愚かな者たち、怠惰な心で『無知』という眠りに耽っている者たち、―その者たちにとっては、昼も夜も同じ〔不覚醒のまま〕なのです。〔二一・四〇〕

私が思いますに、大暗黒の闇である輪廻の中をさ迷いつつあるか、または〔其処に〕留まっている善人にとって、〔次の〕二つのことだけが、とても大きな善果をもちます。〔一は〕家を捨てて、至福のために苦行林に出発すること、〔二は〕正しい判別に長けた賢者たちと共に会話することです。〔二一・四二〕

或る人がいて、もしその人が自分の家にある財を乞い求める人々に快く享受させるならば、また、或る人がいて、もしその人の明晰な知性が〔暗愚の〕闇を打ち破ることに向かって〔進んで〕いるならば、その両人だけは、〔本当に〕生きているのです。しかしもし或る人がいて、莫大な財の中にいても利己的で、また学識を欠いているなら、彼は存在するといっても、実は存在していないのではありませんか。あたかも、形姿だけをもつ、絵に描かれた〔だけの〕宝石の珠のように。〔二一・四二〕

苦労して獲得した幸せが、再び徐々に崩れ去ってゆく時、その崩壊にあたって、人は心に火を燃え上がらせながら、ひどく苦しみます。彼の苦しみの原因とは、〔輪廻的〕生存への繋がりを生じさせる、欺く女である『渇愛』です。もし或る者たちが心において正しく『小欲たること』を確立しているなら、その者たちは甚だ幸せになります。〔二一・四三〕

暗愚の闇を切り裂く『教えの詩』（善説）は、苦労なしに、有益な事へ導いてくれます。しかし不実な〔教説〕においては、たとえ表現は明解であっても、話す言葉は教えとして無益なのです。鍛冶職人は、最も有能な人であっても、雲一つない天空のようなサファイア色の光沢をもつ刀剣を、牛ベルを作るための錆だらけの粗悪な鉄から造ることはできないのです。〔二・四四〕

◇　このように偉大な王は、〔人がもつべき〕徳性と不徳性の区別を知って、正しい道に依る者にならねばならないのです。」――こう〔鹿のかしらは〕語りました。

すると〔なされた〕法話の不死の甘露（アムリタ）のような美味を楽しんだかの王は、鹿たちに安全〔の約束〕を与え、深い敬意をもって、次の様に菩薩を称賛しました。

「〔命として〕生まれてから、この世界〔のすべての生物〕は死と病気と疲労によって苦しめられます。渇愛という〔拘束の〕縄に縛られている生類にとって、繰り返しそれらは苦痛です。このように輪廻は、涅槃〔に達する〕まで、途切れのない再生の恐怖をもつものです。〔しかし輪廻は〕あなた様との出会いの原因であると理解しました。〔すると〕それ（輪廻）は、欠点はありますが、私たちにとって悪いことばかりではありません。」〔二一・四五〕

◇　その時菩薩は王座から降りて、王に別れを告げました。

「王よ、私がいなければ、〔私の〕鹿の群は落胆した気持ちのままで、混乱するでしょう。賊軍なく〔平和に〕大地を久しくお治めください。私は速い足どりで、あの〔鹿〕たちのもとに行きます。」〔二一・四六〕

◇　それから、王から許可を得たその群のかしらは、その森に戻って行きました。

会いたさに満ちた眼をしていたその鹿の群は、遠くから群のかしら〔がやって来るの〕を見つけ、大喜びで、若草の束を歯の先に咥えたまま、群がって急いで駆け寄ってきました。〔二一・四七〕

鹿のかしらが森の奥から去った時に、雌鹿はあたかも眼を閉じてしまったかのようでしたが、心堅固な者（鹿王）がそこに近づいた時、ふたたび眼をぱっちり見開いたかのようになりました。〔二一・四八〕

その雌鹿は鹿のかしらのところにやって来ると、歓喜して大きな眼を揺らしながら、このように言いました。「あなた様の助けにより、鹿王よ、私の心を楽しませてくれるこの子は、森の中を遊びまわることでしょう。」〔二一・四九〕

◇　菩薩はその二つの鹿の群を安心させると、かぎりない喜びを得ました。

―さあ、このように、かの世尊は〔前世に〕動物であっても、利他のために懸命だったのです。そのことをよく考えて、あなた方はかのお方に浄信（浄らかな心）を〔たえず〕向けた者になってください。

『鹿ジャータカ』、〔第二部類の〕第一話〔終わる〕。

【注】

（1）『ハリバッタ』第六話の翻訳としては、Koroche (2017), Hahn & Lohöfer (2016) 以前に、Ohnuma (2004) の英訳と、より厳密な訳である Hahn (2007b) の英訳がある。内容研究として Ohnuma (2000), Steiner (2002), Dimitrov (2004), Dimitrov (2008) が重要である。パラレル文献としては Kṣemendra の Bodhisattvāvadānakalpalatā, (51) Rukmavatī があり、その話の校訂・翻訳は Straube (2009) でなされた。また Divyāvadāna の (32) Rūp(y)āvatyavadāna については、数カ国語の翻訳があるが、和訳としては平岡聡（二〇〇七）が、英訳としては Andy Rotman (2017) がある。その他の並行話や壁画等についての情報は、干潟龍祥（一九七八）『附篇』五二頁、干潟龍祥（一九八一）七一頁注三八を見よ。

（2）ウッパラーヴァティー、プシュカラーヴァティーと呼ばれたこの古代のガンダーラの王都は、現在のパキスタン、ペシャーワル近くの都市チャールサダ Chārsadda である。

（3）主人公の名 **rūpyāvatī** は「銀を有する女」という意味。接尾辞 **-vat** の前にある母音 **a** が強勢によって **ā** と変化して、**rūpya-**「銀」が **rūpyā-** となった形である（cf. Whitney, *Sanskrit Grammar*, 1233d）。この主人公の名前は、同内容の説話である Kṣemendra の Avadānakalpalatā

第五一章では、rukmavatī「黄金の装飾品を有する女」である。また Divyāvadāna の Cowell & Neil 校訂本が基づいたネパール写本では rūpāvatī「美貌を有する女」と記される。その名前の変化の問題については Steiner (2002), Dimitrov (2004) を参照のこと。

（4）「一声うなる声をあげて」と訳した原語は kavalavyāhṛti- で、直訳すれば「一口（一口分）の発声」。解釈が難しい表現である。B 写本 kavalāvyāhṛti- により「一口も〔咀嚼の〕音を立てずに」あるいは「一口も食べずに」と解釈する可能性もあろう。Hahn (2007b), p. 219, note 18 を参照。

（5）ここで現在の生まれたばかりの息子の姿の上に、これから数年後の、可愛い盛りの息子の姿を二重映しにしながらイメージされる。

（6）「人々は確信をいっそう強めました」（lokaś ca sthirataraniścayo babhūva）とは、人々が彼女が示した行動の動機に対する確信を強め、彼女を見本として、惜しみない布施への決意をいっそう固くした、という意味。

（7）ハリバッタがここで用いた「人をひきつける徳性」（abhigāmikaguṇa）という珍しい言葉がカウティリヤ『実利論』六巻一章三の、王の資格を述べた文に見出されることを、Khoroche, p. 232, note 45 が指摘している。五巻四章二にもその言葉はある。ハリバッタが『実利輪』をよく知っていたことがわかる。『実利論』のその該当箇所の飜訳は、上村勝彦（一九八四）の和訳、下巻二八頁と四二頁にある。

（8）この箇所では、君主の徳政によって、あたかも一時的に人寿八万年の本初の社会に戻ったような豊かな自然の恵みを得たことが表現されている。君主の政治の善悪が、自然の恵みや災害を招くとする、中国の「天人相関説」に似た思想はインドにもある。この思想をインドの仏教説話文献において確認した論文として、引田弘道（二〇〇三）：「旱魃と降雨祈願」（『日本仏教学会年報』六八号、一四五頁～一五五頁）がある。飢饉等の自然災害は民衆の道徳的堕落による共業の結果であるが、民衆の道徳的堕落は国王の悪政がその重要な一因となっている。ルーピヤーヴァティーの物語は、乳房の布施によって目の前の親子を救ったという自己犠牲の英雄的行為に留まらず、更に主人公が善政を行う国王になり、民衆に飢饉の苦しみを生じさせた根源的な原因である世間の道徳的堕落を断つために、王として民衆に向かって説法を行うという、いわば次の段階の救済活動も説く点で重要である。

（9）プリトゥ（pṛthu）は伝説上の名君であり、犯罪が横行する無政府状態を防ぐために、聖仙たちが殺された父の右腕を擦って誕生した王である。彼の民が飢饉に苦しめられた時に、王は大地の女神を弓で脅して、人々が生きるに十分な食を得られる豊穣さを約束させた。その時大地の女神はプリティヴィー（pṛthivī）という名前を彼から授かったという。ヴィシュヌ・プラーナ（I, 13）を参照。

（10）国王の三種の力（śakti）とは、梵語辞書によれば、威厳・精力・助言者（prabhāva-utsāha-mantrajñāḥ）であり、Amarakośa 2.7.969, Abhidhānacintāmaṇi 735 などに記される（cf. PW, s.v. śakti）。しかしハリバッタにおいてはその三種の力の内容が、それとは別様に考えられているようであり、例えば HJM 14.3 では「政略と威光と広く知られた剛勇」（naya-pratāpa-prathitaparākramaḥ）と表現される。20.1+ では「剛勇と政略と威厳」（parākrama-nīti-prabhāva）と表現される。Koroche (2017), p. 232, note 47 を参照。

（11）現在の生で受ける業の報いを「花報」（華報）と云い、未来の生において受ける報いを「果報」という。この花報と果報の区別は、説話文献では『賢愚経』巻四、大正蔵四巻三七九上四～五行の文で確認できる。また『望月佛教大辞典』九一九頁の「華報」の項を参照。

（12）この第六話四七詩節は、第七話第八～一一詩節の箇所と主張の内容が似る。

（13）「バリサカ蜂蜜ジュース」のバリサカ balisakha の語は balipriya の同義語とみることができ、それは植物名 lodhra (Symplocos Racemosa) を意味する。Michael Hahn (2011) はコメント（p. 353）で balisakha = Symplocos Racemosa (used for tilaka) と記し、バリサカを額の印（tilaka）とみなすようだ。ただこの場合、赤い額の印が若い女たちの頬を赤くすると Hahn 博士が考えているのか、私にはよく意図が理解できないコメントである。植物 lodhra はインド古典医学で女性の健康を促進する薬草として用いられるので、balisakha-madhu は薬草 lodhra の粉を混ぜ入れた女性用の蜂蜜ジュースと解釈できるのではないかと私は思う。Khoroche (2017) は sweet *lodhra* juice と英訳するので、彼も蜂蜜と lodhra の粉末とを入れたジュースと理解したように思われる。balisakha の語は確かに lodhra を意味すると思われるが、ただなぜわかりやすい balipriya の語を用いずに balisakha の語を用いたかというと、その語は言葉遊びとして、「力強い男友達 bali-sakha」の意味を隠しているからであろう。宴会で若い女たちの頬を染める原因は、アルコールか異性である。つまり裏の意味として、「バリサカ蜂蜜ジュース」は「力強い男友達の〔如き女を興奮させる〕蜂蜜ジュース」の意味があると思われる。

（14）原文 divyāvādikālikhita を私は蔵訳を参照して *vidyāvādikālikhita と読んで「明呪を唱える者が〔地面に〕画いた」と訳した。

（15）土壇マンダラを用いた密教的修法は、最近の初期密教文献の研究によれば、仏教においても五世紀前半には行われていた。大塚伸夫（二〇一三）：『インド初期密教成立過程の研究』、春秋社、二六八－二八九頁、六四一－六四二頁、一〇〇六頁参照。ただしこの第七話で記された土壇マンダラは、いわゆる「尸林の宗教」の表現として描かれたものであろうから、仏教僧が造ったマンダラであるとは断言できない。Hahn 博士による『ハリバッタ』の作品成立年代の推測が正しければ、五世紀初頭にはすでに「尸林の宗教」が北インドで本格的に成立していたことを、われわれは本作品のこの墓場の記述から知ることが出来るわけである。この墓場

の描写には肉切刀をもったダーキニーまでが登場するのである。ただしこのあまりに濃厚すぎる「タントラ的」な墓場の情景描写は、学者によっては、この作品の五世紀初頭の成立に疑問を抱かせる理由の一つとなりうるかも知れない。

(16) 七話第二三〜三〇詩節は、主人公チャンドラプラバがつぶやく独り言であるのか、それとも作者ハリバッタが感慨を込めて語る言葉に属するのか、判断が難しいが、第二三詩節の直前の散文が iti で終わっていることから判断すると、恐らく後者であろう。

(17) 蔵訳は「愛する男の腕輪によって髪の花が落ちた」(dga' boi dpung rgyan gyis ni skra loi me tog lhung ba ni) と訳している。蔵訳が基づいた梵文写本はこの箇所で、現在の写本の読みとは少し異なる読みを有したのであろう。Hahn (2011), p. 354 によれば、その蔵訳に基づき、それは *kāntāṅgadena galitākulakeśapuṣpāṃ という梵文であった可能性が考えられる。また蔵訳からは支持されない憶測上の読みであるが、keśapuṣpāṃ「髪の花」と読まずに *keśapāśāṃ「髪の房」と読む可能性についても Hahn は記す。肩のところにずり落ちたのは、乱れた髪に差してあった花なのか、それとも乱れた髪束の房なのか、決定しがたいが、Khoroche, p. 57 は後者の解釈を取っている。

(18) 原文を直訳すれば、「流れ出る目の水を注ぎかけられた顔で」。ここでの「水を注ぎかけられた」(udakābhisikta)、という遠回しの表現は、葬儀という文脈と関連して、何らかの宗教的儀礼（水を注ぎかける死の祓い浄めの儀礼？）を示唆している可能性がある。

(19) 「火が消え鎮まった」と私が訳した原語は nirvāṇa-vahni であるので、その語を「涅槃の火を有する」と訳すことも出来る。作者が故意に二重の意味を持たせている表現であるが、しかし死後も輪廻し続ける菩薩の死を、一つの涅槃と見なすことは教義上は出来ない。そのためその表現は、ここでは菩薩の火葬を釈尊の涅槃における火葬とイメージを重ね合わせるための詩的技巧として用いられている。

(20) 『ハリバッタ』第八話蓮華王（パドマカ）の並行伝承の、漢訳仏典を含む文献調査は干潟龍祥（一九七八）『附篇』四六頁、干潟龍祥（一九八一）一〇六頁注八九でなされた。最近では伊藤千賀子（二〇〇八）、岡田真美子（一九九二）の比較研究がある。この『ハリバッタ』第八話は Avadānaśataka, (31) Padmakāvadāna に基づいた再話である。Avadānaśataka のその章については Feer (1891) の仏訳と、正確な出本充代（二〇〇八）の和訳がある。別のパラレル文献である Kṣemendra の Bodhisattvāvadānakalpalatā, (99) Padmakāvadāna の校訂・独訳は Straube (2009) によってなされた。

(21) 第八話第二詩節はわかりやすく訳してみた。原文をそのまま訳すと、次のとおり。「美しさ・容姿・威光〔という三属性〕によって、彼は〔人を〕爽やかに愉楽せしめること・うっとり幻惑すること・〔体を〕熱く照らすこと〔の三事〕を生じさせる原因として

の、月・カーマ神・太陽〔の三者〕を同時に、気にもとめずに、凌駕していました。」

(22) この原文 upaśāntamadodayāḥ を蔵訳は「〔戦象たちの〕マダ（興奮時に出る発情液）の発生が消え失せた」と解釈する。

(23) インド古典期の医学における医療行為は、身体における三要素 (dhātu) ― ヴァータ vāta とピッタ pitta とカパ kapha ― が調和した状態としての健康を回復することを目的とする。矢野道雄（一九八八）：『インド医学概論』、朝日出版社、一三頁注三二を参照。

(24) この箇所は、パーリ聖典『転輪王師子吼経』において、新国王である息子が、父である引退した転輪王に質問するくだりを想起させる。その経でも「息子よ、おまえの王国内に貧しい人がいれば、財産を施すべきである」と父は息子に忠告する（PTS ed., DN, III, p. 61）。

(25) シャパリー（śapharī）は、川面を飛び跳ねる性質をもつ小さな白銀の魚。Khoroche はヒメハヤ (minnows) と訳す。この魚はカーリダーサ『季節集』3.3 では cañcan-manojña-śapharī「跳ね飛ぶ美しいシャパリー」と表現される。また『雲の使者』I 40 (or I 43) でも caṭula-śaphodvartana「さかんに動き回るシャパラ魚の跳ね上がる」の語が出る。

(26) リュートと訳した原語は vallakī で、三弦の弦楽器。またもう少し弦の数が多い弦楽器である vīṇā（琵琶）の同義語でもある。

(27) この第一一話の試訳を私は先に二〇一六年に『南アジア古典学』に発表したが、その試訳の修正すべき点を直し、表現も全体的に見直しをした和訳を、今回の論文に加えた次第である。―この第一一話を『鹿ジャータカ』（I）と記するのは、『ハリバッタ』には第二二話にも『鹿ジャータカ』があり、区別するためである。（I）はニグローダ鹿本生（Nigrodhamiga, J 12）、（II）はルル鹿本生（Rurumiga, J 482）にあたる。第一一話の並行話の情報・比較調査としては、Hahn & Klaus (1983), S. 1-16 を参照のこと。そこには十のパラレル文献があげられている。また欧文書誌情報は Grey (2000) の本生話コンコーダンスの Nigrodhamiga の項にある。ハリバッタの両方の鹿本生の梗概は Handurukande (1972), pp. 84, 87 にある。― なおアジャンタには両方の鹿本生の壁画がある。Schlingloff (2000), S. 94-106, 高田＆大村（二〇〇〇）、一四七～一五一頁にそれらの解説がある。

参照文献　（前論文に記したものを省く）

〔第六話に関連する研究〕

Dimitrov, Dragomir (2004): "Two Female Bodhisattvas in Flesh and Blood", in: *Aspects of the Female in Indian Culture. Proceedings of the Symposium in Marburg*, Germany, July 7-8, 2000. Edited by Ulrike Roesler and Jayandra Soni, (Indica et Tibetica, Band 44), Marburg, pp. 3-30.

—— **(2008):** "Some Remarks on the Rūpyāvatyavadāna of the Divyāvadāna(mālā)", in: *Bauddhasāhityastabakāvalī: Essays and Studies on Buddhist Sanskrit Literature, Dedicated to Claus Vogel by Colleagues, Students, and Friends,* Edited by Dragomir Dimitrov, Michael Hahn, and Roland Steiner, (Indica et Tibetica, Band 36), Marburg, pp. 45-64.

Hahn, Michael (2007b): "In Defence of Haribhaṭṭa", in: *Pramāṇakīrtiḥ, Papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday*. Edited by Birgit Kellner, Helmut Krasser, Horst Lasic, Michael Torsten Much and Helmut Tauscher, (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 70). Wien, pp. 213-227.

Ohnuma, Reiko (2000): "The Story of Rūpāvatī: A Female Past Birth of the Buddha" in: *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 23, no. 1, pp. 103-145.

—— **(2004):** "19: Rūpāvatī Gives Away Her Breasts", in: *Buddhist Scriptures*, ed. by Donald S. Lopez, Jr, Penguin Books, London, pp. 159-171.

Rotman, Andy (2017): *Divine Stories. Divyāvadāna*, Pārt II, Boston.

Steiner, Roland (2002): "Zum ursprünglichen Titel der „Rūpyāvatī-Geschichte", in: *Śikhisamuccaya. Indian and Tibetan Studies*, (Collectanea Marpurgensia Indologica et Tibetologica). Edited by Dragomir Dimitrov, Ulrike Roesler and Roland Steiner, Wien, pp. 203-210. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 53).

干潟龍祥（一九七八）：『改訂増補　本生経類の思想史的研究』、山喜房仏書林。

干潟龍祥（一九八一）：『ジャータカ概観』、改訂版、春秋社。

平岡聡（二〇〇七）：『ブッダが謎解く三世の物語　下』、大蔵出版。

〔第八話に関連する研究〕

Feer, Léon (1891): *Avadāna-çataka. Cent légendes (bouddhiques), traduites du sanskrit*, Annales du Musée Guimet 18, Paris.

Ohnuma, Reiko (2004): "17: Why the Buddha Had Good Digestion", in: *Buddhist Scriptures*, ed. by Donald S. Lopez, Jr, Penguin Books, London, pp. 136-141.

伊藤千賀子（二〇〇八）：『仏教説話の展開と変容』、ノンブル社。

岡田真美子（一九九二）：「薬施捨身説話（2）―Rohita（赤）魚本生と魚本生―」、『神戸女子大学研究論文集』六、六七～八一頁。

出本充代（二〇〇八）：「『アヴァダーナ・シャタカ』和訳（2）―第31、33、34、35話―」、『南アジア古典学』三、三九～五六頁。

〔第一一話に関連する研究〕

Grey, Leslie (2000): *A Concordance of Buddist Birth Stories*, Text Society, Third Edition, Oxford.

Hahn, Michael & Klaus, Konrad (1983): *Das Mṛgajātaka (Haribhaṭṭajātakamālā XI) : Studie, Texte, Glossar*, (Indica et Tibetica, Band 3), Bonn.

Schlingloff, Dieter (2000): *Ajanta. Handbuch der Malereien / Handbook of the Paintings I. Erzählende Wandmalereien / Narrative Paintings. Vol I, Interpretation*, Wiesbaden.

高田修＆大村次郷（一九六〇）：『アジャンタ壁画』、ＮＨＫ出版。

※本研究は科研費（17K02217）の助成を受けたものである。